麻生路郎主宰

川柳雜誌

七月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和十七年七月一日發行　第十二卷第七號（毎月一回發行）

一家に一瓶是非必要！

皮膚障害・外用藥

仁丹の靈泉

○全國到る處の藥店にて販賣す

近作

麻生路郎

消すにしのびぬ娘の夢の華やかさ

君の顔で僕の顔でと呑みにゆく

長靴がある玄關のみじめなり

處女を驚かすレコードが鳴る

忘れ難きキスとなれ夏の夜の青さ

川柳雜誌第十二卷 第七號 目次

文苑

川柳指導講座（一）……川上三太郎……（四）
武玉川二篇研究（十五）……梅本秋の屋 森東省魚子 二……（二〇）
明治以後の川柳年表（五）……西島〇丸……（二六）
月評 街の高臺……雨路郎、迷汀 柳……（三八）
戯曲 沒句供養……西田艸樂……（四〇）
北澤莊窓話……山本雨迷……（四三）
四國遍路（其二）……酒井大樓……（四三）
伊豆大島より……庄萬よし……（四四）

ア・ラ・カルテ

夏のこと……窪田銀波樓……（四六）
交響舞踊詩……西いわを……（四六）
父と子……尼綠之助……（四六）
柳心合掌……水谷鮎美……（四七）
燒なほし……食滿南北……（四七）
金澤へ戻つて……安川久流美……（四七）

創作

近作……麻生路郎（一）

近作柳樽……麻生路郎選（七）

川柳塔……麻生路郎選（三〇）

粒々集……柳秀、濤明、東魚（三七）

一路集……信心……高橋かほる選（四八）

夕立……生田翠夢選（四九）

柳界展望……（五〇）

各地柳壇……路郎、艸樂、汀柳整理（五三）

川柳二十日會……機見女記（二五）

川柳家の戸籍調……緣雨（四八）

編輯の窓……汀柳（六二）

本社關係の人々……（六四）

表紙題字……檜重

表紙畫……きよし、鳥平、宰二郎、しげを、路郎合作

右へ左へ

―川柳指導講座「わが子」講評―

川上三太郎

……A……

今月から當分斯うした欄を僕が受持つ事になつた。前擔任者福田山雨樓君は、まことに懇切叮嚀、實に行屆いてゐたけれ共、僕のは持つて生れた野人性と、時間がないため字句の推敲が出來ないのでまことに荒つぽいものになつてしまふだらうと思ふ。然し別に僕は惡黨ではない荒療治の點は平に御寛容をねがふ。

凡そ川柳の投句とは娘を嫁にやるやうなものである。尠くともその心持でなければならぬ。從つて婿家との間には敬愛の二字を以て結ばれなければならぬ事、これは絶對である。次に嫁にやるべきわが娘に就ては、その娘が未熟な娘、不純な娘であつてはならぬ。よしその容色は優れずとも、帶に五彩を放たずとも、彼女は終始純眞であり、衣裳は常に清淨であるべきである。投句亦然り。それは常に選評者に對し限りなき愛と謙遜と、聊かの誇とを以てすべきである。これ自らを高くし且つ選者に對する禮である。僕は諸君に限りなき愛を投げる。故に諸君も亦不變の愛と誠實と誇とを以て對されたい。

……B……

課題は「わが子」である。この出題の意圖は諸君の子供を詠んで貰ひたかつたのだ。然るに集句を見ると「わが子」といふ三字の題詠であつた事は頗る遺憾である。とは言へこれは出題者たる僕にも手落があつた。從來の課題の習性から言つて、「わが子」と言へば「わが子」といふ三字課題と見做してドシ〳〵作句しちまふのであつた。この事は豫め斷はつて置くべきであつたのである。然し今後の僕の出題の意圖は、總て前述の通りであるから、その事は確かり頭の中に入れて置いて貰ひたい。但し今回は此方に手落があつたのであるから、「わが子」三字課題吟もみんな俎上に乘せた。

それから句意の判然としないのが二つ

あつた。即ち

わが子へと他人には知れぬ旅の宿　不二
解消へわが子わが子の肩を持ち　化柳子

これは古川柳の難句と稱するやつと意味は違ふが僕には不向である。強いて解ろうとすれば解らない事もないらしいが川柳はこれが社會的對象となるに及んでは、單に「作られたもの」のみであつてはならぬ。それは亦當然「讀みもの」であるべき筈である。この事は迚も長くなる問題だから、別に機會を得よう。さて次に

子煩惱泣いてわが子を豚と書き

といふのがあつた。これは多分自分の子を豚兒と書く場合の事を詠んだのであろうが、取材が抽象的である上に「泣いて」の誇張がサツパリ利かぬ。本當に豚兒と書くのが悲しくつて泣く親なんてもの、存在は想像出來ぬし。もしあつたすればこの親の方が豚である。また作者がこの中から讀者に一掬のユーモアを授やうとしたのなら、こんなのはユーモアでも何でもない作者はユーモアを僕等に與へやうとするよりもつゝ腰を落つけて、先づ正面から句材を睨む事を勉强した方がよい。ユーモアの川柳は川柳技術からいつて高等科に屬する。一番むづかしいのである。（句主兵庫渡邊正敏君）

……C……

子澤山みんな俺の子お前の子

この句主の名前は僕には馴染がある。諸方でお目にかゝる。言ひ換へるとこの人は自分の娘を方々へお嫁にやつてゐる娘の縹緻も一通りである。この「子煩惱の句もその通り。然しどの娘さんにもこの句主の「眞心」が籠つてゐるだらうか「愛」が籠つてゐるだらうか。この「子煩惱」の句が、所謂「わが子」といふ三字課題吟である事は僕の手落だから仕方がないとしても、如何にも一通りすぎる。僕は句作家である君に、更に望むに自分の句であるといふ誇を持つ事を望む。僕は君の本當の「分身の句」が欲しい。（句主大阪山本葉光君）

ひいき目でわが子を見れば馬鹿でない

あたりまへである。これで好いのなら山柳もやさしいが、尠く共これを

子の話いつか自慢になつてゐる

位にはやらなければならないのだから川柳はむづかしいのである。またおもしろいのでもある。作者は材料を腹の中で五六回ころがしてから吐き出す必要がある（句主高松楊半山君）

飛行機へ乘れるわが子をうちあおぎ

こゝで一寸言つて置くが、投句に際し自分の書いたものに誤字があるかないかは、これは選評者に對する禮儀としても一應は調べるべきである。この句の「うちあおぎ」。「うちあおぎ」若くは「打仰ぎ」と正しく書くべきである。ところでこの句の「乘れる」だが、これはわが子が「操縱するといふ意味なのだらう。もしわが子が乘客として機上の人となつたのなら、何ら趣はない。然しわが子が操縱士になつたにしても、この句の十七字中十二字までは句意の說明に使つてある――即ち飛行機に乘れるわが子――さうして肝心な句主の若くはこの子の親の感激に「打仰ぎ」の五文字しか使はない

のは拙劣である。わが子が飛行士であるといふ説明は十二文字なんて大切な十七字の三分の二を使つちまはなくつたつて「飛行士のわが子」と八字で濟む。否、もつと考へればもつと尠ない字數で濟むだらう。「打仰ぎ」も平單で作者の苦心した句語ではない。こゝでヒットを打たなければこの句は駄目なのだ。考ふべしである。（句主今治、渡邊曉童君）

……D……

以下の三句は句の巧劣は別として本當に自分の子を詠んでゐる。

腕曰にわが子わが子の寢亂れて（A）
旅の宿眠れぬまゝに子を思ふ（B）
わが子からこんなきたない家に（C）

但しCの句、前にも言つた通り「きたない」は「汚い」『なれ』は「馴れ」と正しく書くべし。

（A）の句は拙いが、自分の心持を素直に言つてゐる。たゞ「寢亂れて」といふ用語に「氣取り」のあるのがいけない。「腕白」ももつと自分から考へ出した言葉が欲しい。寢てゐる場合とは違ふが

子の下駄がみんな散ばる健かさ　山雨樓

往來へつぶてのやうに子供出る　小太郎

といふやうなくも參考になろう。（句主、廣島、町田滿女）

（B）の句は靜な句だ。然し「眠れぬ儘に」は苦心のない用語でこれでは凡句になる。「旅の宿」もこんな定型語でなく自分で考へた言葉を持つて來たい。子を思ふ句では句意は違ふが句主と同じ土地の齋藤松窓君の

ものおもふ繭ゆる中に子をおもふ

といふ佳唱がある。範としたまへ（句主、京都、福田丁路君）

（C）の句も句材は有りきたりである。然しこゝでは「わが子から」が句語になつてゐる。これを「子煩惱」とか「子澤山」とかしたら、句は數等、點が減る。今更ながら句語は有難い。然し作者はこんな所で低迷してゐてはいけない。もつと精進すべしである。（句主、大阪、深江勝人君）

……E……

集句はまだあるが最早豫定の紙數に達した。それに時間もなくなつて來た。こゝへ來て諸君に言ひたい事は、出來るだけ正直にものを見て呉れ――と言ふ事である。僕等はなまじ大人であるが故に、なまじ十七字をかぢつてゐるが故に、ものを正しく見る事が出來なくなつてゐる事がある。子供は何んな繪を描いても必ず太陽を描く。ところが僕等は太陽を忘れた繪を描く。京都の川柳家小島草村君はバナヽの標語に「空氣、太陽、水、バナヽ」といふのを創つたが、あれは僕等によい諷刺であつた。全く僕等はバナヽと並べられるまで、空氣、太陽、水の有難さを忘れてゐたのである。これは笑へない大人の喜劇だつた。

本誌の主幹麻生君には「わが子」の佳唱が澤山ある。

おれに似よおれに似るなと子を思ひ
子澤山僕の枕はどこへいた
子を死みし學校に子の多いこと
まだ弟があるやうにいふ悔み聞き
どの子もどの子も息災でお元日

最後に僕の「わが子」の句を御覽に入れよう。

何時もよく寢る子守唄それで寢る
そもや吾子の見詰むるところ塵もなし
子の顎がやつと届いた汽車の窓
吾子病んで單身闘ふ四十度
縄飛に混るわが子の聲を聽き

近作柳樽

路郎選

貰ふ譯ある目の前の金包　神戸　朝雨
爭ひの理詰めにされた瞳のやりば　同
孝養は怠り勝で御健在　同
嘲はらふ人は齒莖を見せませぬ　同
雙眼鏡に這入る女の顏まとも　大阪　大門
出來る子で定石通り弱いなり　同
生活は安定をして胃酸過多　同
未亡人吼え立つ犬に屹となり　同
身にせまる不幸へ砂を見てゐたり　愛ケ池　豆樂
寄宿舍の名殘りへ月のまんまるし　同
指きつた血でさへこわいはなるに　同
愛着は天鵞絨の持つ手觸りか　大阪　德三

盜難へ少し推理もつけ加へ　同

護送車のカーテン白く雨をぬけ　同　今治　呂史

久さしぶりやはり達者で御座ります

酒のめば少こしの唄を持ち合せ　同

神様へ少こし無理とは知りながら　同

失禮な瞳がありつんとして降りる　同　金澤　今雨

畫の部へ女給ほくろを落して來　同

ハイヒール振返へられたなと思ひ　同

春帆、承春を難難す

雨とふる答に笑へる彼でした　同　廣島　蛙庵

作るよりいゝ條件で娘は賣られ　同

圖太さはこの上借りる指をつき　同　松江　春朗

箸箱の音やかましくみんな無事　同

ほんとうに親しく出來る瞳だらうか　同

湯たんぽに衰弱しきつた足素直　同

宿替の好きな夫と苦勞する　同　大邦　翠峯

取次ぎの電話氣兼な足袋の裏　同

畫休みのろけの續き聞される　同

人生の明暗めし屋チラリ見る　十三　牧人

社長たゞ考慮をすると云つた丈け　同　同

素人が使ひくさつた鋸きしみ　大阪　品子

女秘書社長好みの柄を着る　同　同

登記所で買手の下駄がちびてゐる　同　同

公休日デスクの上に猫がゐる　今治　伶人

行くか歸るか銅貨ちやら〳〵　同　同

あきらめて忘れる時を待つばかり　同　同

ものにする腕があるかと娘の親父　同　一風

眞劍にきいてゐるかと見直され　同　同

金がゐるところでプラン行きつまり　神戸　久米雄

先生のあだな淋しく受けておき　同　同

丹波路の春謳歌して女の子　同　同

ふところをさぐらす墓の名刺受　大阪　新郎

父の死を知らす受話機と知らず當て　同　同

嘘つけぬ氣性をいつか使われる　同　同

辻易者凡人すぎたのへおだて　同　同

握砂あくまでも詩に淋し

人の顔向ふに見える墓地の畫　同　花鳥

一散に歸る音する辨當箱　同　同

夫あり子あり女給の稼ぎ高　神戸　九葉

樂天家將棊が強くなるばかり　同

本棚も机の上もひとり者　同

天主閣旅は淋しきものと知り　松江　耕二

明けかゝる神代ながらの大社　同

貧乏は涼しきものよ素ッ裸　神戸　勝太郎

人格者顔のしまりにふと氣付き　同

子を抱いてふとんを足でめくるなり　今治　紫陽

萬事意の如く社長の卷煙草　同

散水車別に惡意があるでなし　名古屋　呂香

故郷の娘にいゝ柄がある店仕舞　同

心境の變化返信なども溜め　燈ケ池　靜太

質やから出る石ころの道かな　同

札もてばきれいにたたんでおく母よ　筒　六朗

眉ひいて色なき肉を賣る窓邊　同

注射器のましろき液にある愁ひ

頬骨が目立ち奇蹟を考へる　大阪　猪の住

看護婦の個性も知つて病み續け　同　同

算盤の音ビルヂングの音でなし　同　不二夫

手料理の素速く切つて慈悲があり　同　耕朗

きさらぎのかべの白さへひゞく咳　同　同

新婚の香のみなぎるもうれしけれ　京都　美風

無理聞いて貰ふ頭のみにくさよ　同　同

貰ひ兒にとてもよく似た乳母でした　奈良　双亭

松葉枝雀でさへも逃げもせず　同　同

自殺者の胸へつゞいた蟻の群　名古屋　三八朗

飲む程にどんな野心があつたやら　同　同

賣られ行く事窓へ雲の切れ〴〵に　廣島　芳泉

人妻になつてお米の高いこと　同　同

あれだけの佳い聲で居て金魚賣り　大阪　利生

酒飲みは親讓りなり貧乏なり　同　同

特價品のしをつけたら判るまい　今治　曉童

戸迷ふた客手土産を持つて去に　同　同

いたずらへおとなりさんがおそれ入り

小心の男波瀾のない暮し　同　文庫

今は今昔は昔屋敷跡　同　都留逸

肖像畫いつち儲けた頃の事　同

あによめは三年前の唄が好き　同　節子

一時二時所詮は歸り來るところ　大阪

押入れに何もかもある新世帶　同

面白くないのか女眉を寄せ　札幌　榮三郎

張り切つたまんま丙午の處女　同

お遍路のきびしい坂を有難く　高知　珍普

地下鐵を出て愛人とどこへ行く　同

母と娘に簞笥の上の置時計　大阪　葉光

うとまれてぬるき粥食ふ花の留守　同

青空が誘ふ彼女も恢復期　神戸　木通

樂書を拭いて主人は溫順しい　同

風船が破れたように乳が出る　尼崎　觀月

月給は五拾圓也さくら咲く　同

初蚊帳へ子供は出たり這入つたり　大阪　菊路

ビラ配く讀んで呉れうが呉れまいか　同

ヒイキヒイキで拍手の場所があり　　雛千代　　同江
軍人へ支那語で呼ぶも戰術か　　同　　同
スタンドを消すと腹が減つてゐる　　山川兒　　同

若槻男を迎へて

仲展もせず大臣を産んだ市　　同
環境は元校長の盗みする　　靜波　　大阪
鯉のぼり麥の青さの一軒家　　同

砂遊び大中小の足の跡　　正柳　　尼崎
レントゲン骨だけにしてまだ死なぬ　　同
堅く世を渡る小金を抱いて居る　　柳兒　　長野
ハンストは調停を待つ構えなり　　同
蛙みな出て來い星がきれいなり　　一沫　　大阪
此處からは行かれぬ塀のほし大根　　同
ヂレツトへ輕い謀叛り宵を出る　　葉魚　　奈良

奈良正倉院にて

佛像に顔近寄せて春惜む　　同
激情がほし淺間の煙みゆるなり　　有爲郎　　長野
金魚の死ボイとつまんで捨てられし　　同

わが心奪ひ去りたる白き手や　今治　輝親

洗濯をすませて春の土手に寢る　同

しつこいとポストは思ふてゐるだらう　石川　義風子

人さまの手先に動く唄があり　同

箆臺へ朝の欝氣をおさへつけ　神戸　木履

歔欷したエプロンを卷いて去に　同

出棺の事務的な手と足をもち　大阪　水客

炭つぎたして義理にまけまいとする　同

日曜と思ひたくない藥瓶　靈ケ池　一更

虫の的傷の痛みに似たひゞき　同

お見舞のしらじらし聲に雨の音　同　龍之介

山の蒼さにかなしみを斷つ　同

愛情のない冷たさで握られる　廣島　呂烈

若草の嘆き墓標の朽ちし側　同

演習の斥候柿を一つもぎ　尼崎　隆三

保險屋は先づ釣竿をほめてゐる　同

鶏に短氣な事を覺えられ　京都　丁路

麥の穗を拔いて突然叱られる　同

いとはんの笑ひも哀れ二十八　大阪　墨洲

舊友の生活と知つた靴の底　同　素月

狆連れて小口當座を出しに來る　同　同

國道が出來警笛になやまされ　同　源太

良心をわらう紫煙のひとすじに　同　同

こんぶ嚙んで船室の隅に忘れられ　高知　過佛

再婚の姉に昔の意地がなし　同　同

大金庫中味はみんな親ゆづり　大阪　梢雨

體溫器ひとり檢つて氣が弱く　同　同

胸を疾む女に椿姫想ふ　同　丹三郎

夫婦今日心のゆとり顏に出て　松江　鐘路

木賃宿生國知らぬ娘が三人　大阪　千鳥

母と娘の暮しへ號外通り過ぎ　同　寛水

煙突の影にも不平ある社宅　神戸　天風

珊瑚珠へ藝妓としての意地を持ち　高知　星水

大地震また學說が間に合ず　石川　彌久

健康な子を母親はよく叱り　大阪　沐天

この證據法の際間を考へる

空想はさびし鍬はさびてる　　島根　凡愚

花散つて今更ながら廣い部屋　　名古屋　世香

赤錢で子の癇癪を片ける　　同　石南

にほはざる煙草にも似て我は果敢なし　　大阪　やすを

食ふ事を又考へて居る胃散　　名古屋　嵩喜固蘊

招く樣柳の見へて二人づれ　　東京　勇一

神經は鋭し初夏を痩せてゐる　　名古屋　龍鳳

村祭將棋をさせば暮れてゐる　　今治　流汀

無雜作に髪を伸してこわがられ　　大阪　玉葉

カンテラに通行止めの字が光り　　同　美津女

晩酌に子等の希望を聞くキゲン　　廣島　都子

景氣も知らず利用されて居る　　大阪　四五磨

故郷からの土産は嵩で驚つかせ　　同　世間音

五月雨子供の部屋が欲しいなり　　十三　琴泉

本辰本自慢酒倉ノ火

酒桶のまゝに上かんできあがり　　大阪　遊歩

京の春お上りさんへ晴れ渡り　　奈良　青柿

汽車自働車ハンマーの音春の暮　　大阪　廉夫

花に舞ふ袖のひら〳〵花も散る　高松　柳夢

このまゝで生きんとすればこの暮し　金澤　綠水

大阪は嵐新聞まちきれず　大阪　公子

たわむれの戀には女氣が強い　今治　小樓

妻危篤

百二十打つ脈搏の息づかい　愛媛　草樓

表札が二枚支那蕎麥賣れる街　大阪　天國

文藝のない町算盤がひゞく　同　いの助

血壓の高さへも一度子を集め　島根　章泉

招かれて酒の飲めない詫びを言ひ　神戸　忠司

放浪の老の眼にしむ流れ雲　島根　美稻

山の水飲めばいのちの延びさうな　蘆ケ池　スヽム

何事かほゝむ顏の薄化粧　松江　圭之介

春ですと言ふセルの肌ざわり　愛媛　一服

急停車させて平氣な女なり　大阪　三碧

あきらめた一人が膝ををうつて立ち　神戸　吉左右

魚河岸の活氣は靄を掃いてゐる　東京　梟人

ハイキング放浪性の君と僕　松江　野生

どぎまぎと逢ふ約束の帶を締め　京都　狸公三

囁きがみんな藥つぱに溶けて行く　東京　菊子

お天守の朝一番の陽に映ゆる　高知　翠洞

飲けるので花見藝妓になじまれる　松江　光男

砂煙お地藏さんへまともなり　今治　藤生

泣けるだけ泣かう德利の影ゆらぐ　大阪　敏

指の太さをさびしむ宵の女工さん　同　谿正

カクテルの氣焰苦しい窓へ立ち　名古屋　草

子の語あきらめ性と苦勞性　愛媛　富美女

ラツシユアワー線路工夫の瞳が鈍し　大阪　歌都路

虛榮心苦しい家計簿書いて居る　東京　吾一

お風呂屋の煙が止んでワンタン屋　螢ヶ池　柳太郎

僞善者だ皆んな女がほしんです　同　まさる

病人も蛋の行方に座らされ　大阪　阿伽陀

紋付で座る日も有るチンドン屋　松江　佗佛郎

新婚は仲居の世辭にかしこまり　神戸　蘇堂

初詣り下駄の輕さをつと感じ　愛媛　喜子坊

ボーナスの出た事を知る女給の瞳　東京　樂天坊

理髪店出て來た顔で純喫茶　鳥取　喬土

人生をみそかの風呂で考へる　東京　茜草女

差引いて銀貨もくれる給料日　大阪　雅星

應揚に香具師は銀貨もかき集め　同　つと夢

車窓から見えた社に目禮し　伯耆　仰天

今は亡し口唇までもゆるせしに　津　藤四郎

夕立に淋しく病人眼をさまし　松江　庄介

眞すぐに歸へり我が家の冷奴　大阪　美代路

モスリンの御召に近い科學の世　同　奇臺軒

同情の若さは戀になりかける　同　寒草

ミツキイのキツス音ありTHE・ND　京都　光彌

ファストラブへ生きる男に敵があり　大阪　哲平

出勤の女の歩調侮れず　秋田　醉芳

氣前よく飲んで女の名もわすれ　愛媛　京司

川柳指導講座　課題「わが生活」一人一句　選者　川上三太郎氏

「わが生活」といふ文字の課題と思はず、自分のくらしに就いての感想、體驗、抱負などを十七字見當のものにして下さい。

〆切　七月二十日　發表九月號　投句　本社事務所宛

武玉川二篇研究（一五）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

（447）

梅咲て手心かろき鉢たゝき

秋の屋＝梅の花が咲出して、漸く春に近くなり、自然に心が浮立ちて、鉢を叩く手も輕くなるといふのであらう歟。

東魚＝歳時記によると、鉢叩きは十一月十三日から十二月二十八日の結願まで行ふのであるから、十二月末にぽつ〳〵梅が咲きかけて、年の内に春立つ氣分に、手も輕く打ち叩くと云ふのであらう。

省二＝「羽織きる春もあるべし鉢叩」の古句あり、一輪づゝの溫さに叩く手心も輕るくやあらむ。

（448）

また惚た氣て追善の歌

秋の屋＝瀬川菊之丞といふやうな、女形の追善歌かと思はれる。

東魚＝「また」は「又」か、或は「今だに惚れた氣で」と云ふ方で、「また」か何れであらう。昔を思出して、再び夢中になつてゐた頃の心持ちに戻つて、追善の歌をよむと云ふのであらうか

省二＝古句に「又」と最初に置かれたのを多く見受けるから「又」として解した。（402）（428）等の如し。

（449）

瘡のうへに乘つて居る母

省二＝時を定めて發るからオコリといふ。押へて貰ふと幾分らくになる。「すばらしいのは關取の童病」、童病ともいふ。

秋の屋＝未だ妻を迎へぬ青年らしい。

東魚＝乘つてゐる母の姿、心配してゐる姿が思はれる。佳句と思ふ。

（450）

雛形に最う手の切る枯野原

省二＝枯野原に對し雛形とは、？。

秋の屋＝「手の切れる」は枯薄らしいが、雛形が何とも解しかねる。

東　魚＝「雛形に手の切れる」は手本にする、云はゞモデルにする花が無くなる、即ち染物や織物の模様にでも取らうと云ふ種材が種切れになるとの意かと思ふ。

省　二＝お説面白し。

（451）　**娘は尾羽のかれぬ臭付**

省　二＝尾羽打枯らすは、落ぶれて、みすぼらしく成る事、浪人になり尾羽打枯らしても、娘は美しい尾羽のかれた様な顔付ではない。―浪人の娘が美しいといふ事になつてゐないと、話は進展せぬ。

秋の屋＝「尾羽のかれぬ」は面白くない詞だ。解は前説の如くである。

東　魚＝尾羽打枯らした中に、娘だけは天然の容色を失はぬ美しいものだとの意。

（452）　**忝びす講から嫁のしこなし**

省　二＝江戸の商家は、惠美須講を盛大に行ひ、多くの宿を招いた。「附け聲で夷の鯛は嫁へうれ」など詠まれ、講日に於ける嫁は、目立つた役柄を帶むでゐたとも云へる。「しこなし」は振舞ひの謂。漸次嫁の手腕が認められる事であらう。

秋の屋＝今迄は客分としてあつた娘が、親戚や知人を招く姪子講の席で、表向に嫁と披露され、自分も其氣で來客を攝待するのであらう。

東　魚＝初々しい中にも、才はじけた嫁が想像される。佳句と思ふ。

（453）　**六人の子のうちに玉川**

秋の屋＝不可解。

東　魚＝六玉川の中に毒の玉川があるやうに、多くの子の中には、出來の悪いのもあると云ふのではなからうか。（玉川と云ひ放つた處に、玉川の例の如くと響くやうに思はれる）。

省　二＝「六」と「玉川」から六玉川を想ふ。すると一人位は厄介者も出來るといふ様に解せざるを得ないが、持ち廻つた表現ではある。

（454）　**金の減たもしらて本服**

秋の屋＝人參の代に娘を賣つた例もある。

東　魚＝可笑しみがある。有福な慾張りなをやぢが、本服のあとで驚くらしい場面が想像される。

省　二＝「大わづらいが藏へひゞける」（ム六）治つてしまふ迄は、金の減つたなどは、思はぬが病人の心理狀態、私など毎年後半期を病み通すので體驗がある。「本服」は本復ならむ。

（455）　**夜はしら〳〵と生殘る下戸**

秋の屋＝結婚披露の宴會に、上戸等は悉く呑み潰れたけれども、下戸は翌朝まで白面でゐる。

東　魚＝夜の明けるまで、附合はされる下戸は、全く朝になつて、ほつとして生殘つた心持ちであらう。

省　二＝「生殘る」、かなりの忍耐が窺はれる。

（456）　小僧の仕落舌をちらりと

省　二＝一寸舌を出したり、頭をかいたりは、日本人の特有にやる事ださうだ。

秋の屋＝此の小僧の將來が危まれる。

東　魚＝此奴、落語の成田小僧の亞流か。

（457）　眉毛から算え覺る若狐

省　二＝諺に「狐と鼬は人の眉毛を數へる」と。人を魅するの謂。一人を欺す事から、娼妓を狐と稱し、尻の穴の毛まで數へるといふ。

秋の屋＝此の句は青樓の若狐（新造）らしい。

東　魚＝若狐はいさゝか、くすぐりのやうに思ふが。

（458）　投出す財布うそのない音

省　二＝投出したのだから、調べらるれば財布の中身は直に判る。嘘などつけるものか。本音がする筈だ。

秋の屋＝嚢中無一物で、投出しても音はせぬのであらう。

東　魚＝ヅツシリとたんまりある方の場合にも、取れるやうである。

（459）　柔取此度の店も追出され

省　二＝柔術自慢。時々腕試をされるのに困る。歩き方なども豪傑振り、店に不向。

秋の屋＝落語の三軒長屋に其例が有る。

東　魚＝蛭子氏說なら店はミセ。秋の屋翁解ならタナでなければならぬ。タナの方らしく思ふ。

省　二＝タナ也

（460）　響ちきられた笛て齒かなし

省　二＝笛吹きは齒をいため、早く齒がなくなるといはる。齒のない事で笛の上手の證據にもならう。「笛故に反齒にならせ給ひけり」（ム七）。

秋の屋＝私の實父も尺八を好んで吹き、其爲か若年の時より齒が惡かつた。

東　魚＝矢張年も相當老の部にあるやうに思はれる。

（461）　後家若〳〵ときり〳〵す飼

省　二＝キリ〳〵スでも飼つてみる、氣分が若々しい。キリ〳〵スは直に死ぬので、いやがられ哀れに思はるる句が多いのである。今なら多產の十姉妹飼などとあるべきか。

秋の屋＝鶯を飼ふのは艶に優しいが、蟲蜥では少し淋しさを感じて、後家の飼ふものらしく思はれる。

東　魚＝生きものを飼ふ處に、若さが思はれる。殊に老いては命短きキリギリスなどは飼ふ氣にならぬであらう。

省　二＝武玉川十二ヘンには、「鶯を飼ふ後家のほや〳〵」と

(462) 練供養笑ひそうなを跡に立

省二＝「御本坊花の外にはお練也」。上野東叡山開山忌が十月二日修せられ、「辰の刻御本坊より御門主御輦に〻慈眼堂へわたらせらる、園山の院主惣出仕ありて法華八講修行、行道散花等あり、伶人音樂を奏し巳の半刻に法會終る。これを俗におねりといふ、貴賤群集す。」（東都歳事記）この練供養に參するので、先登に立つ僧は威儀堂々、眞面目にやつてゆかねばならぬのは當然。

秋の屋＝「笑ひさうな」は若僧である。

東魚＝壯嚴よりも寧ろ長閑やかな氣分である。この練供養は中將姫の忌に、當麻寺で行はれる法會の方であらう。それは四月十三、十四日とある。夏の季題である。

省二＝「練供養祭り顏なる小家かな」（無村）は、當麻寺のを詠むだもの、佛家の儀式なのだから各地で行はれた。其中でも中將姫忌日は有名であり、練供養を字典で引けば、それが代表的に記載されて居る。江戸では上野が古川柳に詠み殘さる。どちらにでも通用する句である。八尾にも練供養あり蛸市と稱して賑ふ。

(463) 瀨戸物店に餘念なき尼

省二＝尼さんは靜寂な氣分感を與へる。瀨戸物屋も奇麗に列べられてある景觀は靜寂だ。兩者により句材となるに充分だ

秋の屋＝瀨戸物店は、何となく清氣に感ぜられて、尼法師とは宜い對照だと思ふ。

東魚＝餘念なきは、描き得てゐる。

(464) 雨やみを行聟のだいなし

省二＝長い間降りやむのを、軒先でまつて出掛けたのは、聟らしい弱さだ。

秋の屋＝土砂降の雨に遭つて、あたら花聟の衣裳がだいなしに成つたのである。

東魚＝駕籠へでも乘ればいゝのに、良い若い者のくせにと聟を冷かに哀れんだ心持ち。

(465) あはら屋のとう〳〵松に寄懸り

省二＝松に寄懸つた景は、あばら屋であつて一層と佳。

秋の屋＝墨畫などによく有る圖だ。

東魚＝「とう〳〵」が面白い。時間的な處がのんびりとして面白い。

(466) 笠から先はしらぬ生靈

省二＝笠から先きが、說明しにくい。？

秋の屋＝梓巫の口寄かとも思ふが、未勘。

東魚＝柳雨木は芝としてあるが、原本は笠と思はれる。句意は何とも解らぬ。

(467) 玉の緒のくる〳〵卷に五十兩

秋の屋＝假名手本忠臣藏の五段目らしい。

東　魚＝五段目を匂はしてゐる事は明かのやうである。命にかけて大切に包んだ五十兩―樂に巧みな句法に敬服する。

省　二＝「五十兩しめの財布だなどとしやれ」悪い洒落だ。

（468）　**曳舟の引ぬ時にも萩の風**

秋の屋＝淀の川湊の捨小舟のさま歟。秋の淋しい光景である

東　魚＝原本「荻」らしく思はれる。柳雨氏は荻にしてゐる

省　二＝原本「荻」なれば、その方が適應して居ると思はる「靖船を隱して荻の戰けり」などの如く。

（469）　**三念佛へ引ける錢さし**

省　二＝三念佛とは。？。（追記多少手がゝりを得たれば尙調査の上添記す）

秋の屋＝三念佛不明である。

東　魚＝三ケ所の名高い常念佛堂でもあるのではないか。調べてみたが、不解。

七月の木曜會

本社同人の木曜會は四日、十一日、十八日　二十五日です、この日の夜はお忘れなく事務所へお越し下さい、そしてこの木曜會を、もつと有意義なものにしたいと存じます。

三越を詠んだ川柳

三越の車近所をうらやませ
　　奥野　禿山

籐椅子の山三越の配急車
　　生田翠夢

初誕生三越からの屆けもの
　　增位汀柳

三越でお金のたかを考へず

國の母まづ三越へつれて行き

三越で買ふてやる氣も親ごゝろ

大阪高麗橋　**三越**

電話本局
(23)
3540
5500
5550
番

川柳二十日會には どなたでも出席出來ます、毎月二十日の午後から夜にかけて不朽洞一南海線玉出驛西三丁キング喫茶店一で路郎主幹を中心に語る會です、會費の定めはありません。

から梅雨かなと思はれてゐるこの頃今日の廿日會と光耀會は午後からふりみふらずみの日和となつてゐた。しばらく行かなかつた間に玉出驛には地下道が完成してゐた。はじめての通りぬけは珍らしいが、習慣は恐しいもの以前とは時間の點で階段の上り下りだけ損になると思ひ乍ら、カロンコロンと足駄の音をひゞかせて五一キロの體を運ぶ。

例によつてキングのBテーブルに腰をおろせばまづ眼についたのが數々の草花である。夏はぜの赤色の交つた美しいみどりカーネシヨン、ダリヤ、グラヂオラスのそれ〴〵個性のある赤い色、百合のホワイトなど。あゝこの花々に圍まれたルームにこそ生の憩ひがあるのだ　路郎先生や葭乃奥さんと話してゐる間もアートちやんがレコ！ド係りとなつて洋樂をきかして下さる。史呂さんがまづひとり身の氣輕さに七時頃お顏を見せる。

廿日會も一週年が近づいてゐるが史呂さんが無缺席とあるからたのもしい。葭乃奥さんが「何かで　表彰せんといきまへんなあ」と云はれると路郎師之に應じて「そやなあ、何がえゝやろ！ま活字なと大きうしときまよか。」にはさすがの史呂さんもギヤフン。我何をか云はんの姿だ。しばらくして汀柳、禿山の御二人が出席される。丁度法善寺の花月からの放送をきゝかけてゐたが、史呂さんの相棒が見えたのでこつちの方が面白そうなので、スキッチはあはれに切られてしまふ。禿山氏多少病氣との事であつたが何時の間にか史呂さんとAテーブルでちびり〳〵はじめてゐる。おくすりよりか、この方がよくきくのかも知れない。汀柳さんは先生と雜誌の話が終ると退席。その間も他の顧客が入り代り立ち代りして賑ふ。忙しい葭乃奥さんをつかまへては光耀會の計劃で胸をとゝろかす。尙當夜は鈴木嘉一氏が川柳雜誌の契約をされるなど、新らしい讀者を得たよろこびにル！ムは明るい。おそく夢裡さんと暗栽さんがめづらしく出席された。光耀句會の兼題の披講をきゝたい希望もあつたが時間の都合で誌上に發表する事にした。

（機見女記）

兼題「鐘」　葭乃選

一周忌かなしい鐘の音　美奈子
卒業生校舍の鐘に送られる　同
鐘一ツ二ツ代參らしく　公子
母でも子として寺の鐘の音　同
れがへりの枕はしの旅の鐘　貴志子
工女今終る鐘なり波高し　同
天王寺の鐘一錢を出し　機見女
思ふ人あり鐘樓への　葭乃

後援部

鐘ット撞いて歸つハイキング　史呂
鐘の音チツパーチク幼稚園　禿山
石凡鐘は小さく鳴り　久流美

兼題「單衣」

この單衣姉にせが求めたり　美奈子
夕涼みはでな單衣に目がぎ　同
水害の單衣で伊勢に奈良に　公子
急行へ單衣のすそがからつ　同
中年のどもの單衣のはで好み　貴志子
縫ひはじめ父が單衣に吾單衣　同
單衣になつた窓をあけ　機見女
お茶の日の菓子が重箱の秋　葭乃

後援部

打水へ單衣の裾を高くゆ　史呂
六月の單衣が寒い天主閣　禿山
押し板に單衣はあるかやうの　久流美

明治以後の川柳年表（柳誌柳書の部）

【その五】

西島○丸

（書名、誌名）	（發行年月日）	（發行所其の他）
群玉　韞光　第一完	（明治十六年癸未三月）	東京、韞玉社發行、中本和紙廿七葉、「せんりう」と號す
うさはら誌　第一號	（明治三十年丁酉一月）	東京、京橋區南鞘町卅一、文友社發行、菊版三十四頁、狂句欄
川柳比佐古　第一號	（明治四十四年辛亥一月一日）	横濱市宮川町一の五比佐古發行所横濱寸句社發行「明和」の改題號數明和より續く翌四十五年夏、阜山の死により廢刊
新風俗詩　第五號	（同　一　月）	末詳
我樂多草紙　第一號	（同　二月十八日）	八王子比佐古會發行、四六判四十八頁
友千鳥（萬朝報募集狂句一千回記念互選大會）	同　二月廿四日）	東京、京橋萬友會發行、菊半横廿二頁
成程妙々山柳解　全一册	（同　三月廿五日）	東京、神田中島辰文館發行、雨谷一柴庵編
川柳上卷（近世文藝叢書第八）　全一册	（同　三月三十日）	東京、京橋圖書刊行會發行、初編――三十編
川柳下卷（近世文藝叢書第九）　全一册	（同　六月三十日）	同　上、三十一編――六十編
徵　第一號	同　六　月）	東京巢鴨二の三五新彰社發行、大正三年四月で終る

轍（わだち）第一號（同七月一日）大阪市西區九條町短詩社發行、八月等二號を出して廢刊、菊判

新選柳多留　全一册（同七月十三日）東京、日本橋法木書店發行、小川香雪編十一世川柳の撰びし東京十五區の句を載す菊半横綴

絮　第一號（明治四十四年辛亥八月）宇和島、南豫川柳社發行、安波半我氏肝煎、三號で廢刊

谺（こだま）第一號（同十一月一日）京都市御幸町松原上ル土岐水光方谺會發行、菊判、休刊期不明

川柳現代　第一號（同未詳）兵庫塚本通五丁目廿三、川柳現代社、江柳寺氏等經營、新傾向

鵺（ぬえ）第一號（同未詳）筑前國八幡槻田四條町ノ七〇一、川柳鵺會、菊判、パーセントの改題大正三年二月十五日第五十一號で休刊、後五十二號追刊

蕾　第一號（同未詳）神奈川縣愛甲郡愛川村田代川柳會、松本春花經營、謄寫版

川柳江戸砂子　全一册（明治四十五年壬子一月五日）岐阜市西濃印刷會社岐阜出版部發行、今井卯木著、昭和五年十一日東京春陽堂より增補して上卷發行

みなと　第一號（同一月）横須賀市汐留横須賀川柳社、五號で廢刊、土左衛門氏肝煎

水鳥　第一號（同三月二十日）京都、押小路麩屋町平安川柳社、和紙四六型謄寫版五號より活版編輯本田溪花坊、第二卷第三號で休刊

十句集　第一輯（同五月十五日）名古屋、熱田富江町中京川柳社、合判三八頁、名義大曾根大吉大正二年二月四日第二輯發行

ツバメ　第一號（同六月一日）神戸、相生町四ノ三二五乙鳥會

杏林川柳　第一輯（同六月十五日）東京、本郷龍岡町朝陽堂發行、佐瀨世外編、大正三年三月五日第二輯發行

集　第一號（同不明）大正二年の新川柳四月號に大正元年の川柳中に、八月、横濱「集」四、發行の記事による

（明治四十五年七月三十日以後ヲ大正元年トス）

川柳一萬句集　第一（大正元年壬子八月）　京都・水鳥附錄、蜻蛉庵編、新作家一萬句集、八頁

大正川柳　第一號（八月二十日）　東京、芝高輪柳檀寺川柳會、菊卅二、昭和二年一月十五日の百七十二號より、川柳人と改題

川柳新柳眉集　第一號（同八月廿五日）　東京、牛込柳眉會、編輯窪田而笑子・四號後、若竹」と改題、滑稽文學の復活なり

華　第一號（同九月）　鳥取縣米子町東倉吉町米子川柳社、謄寫版、十月より活版、十二月號限り休刊

初音　第一號（同九月）　大正元年の川柳界の記事、九月神戸より（初音）發行による

漣　第一號（同九月二十日）　大連、紀伊町大連川柳會、大正三年効稚園と改題、翌四年紅柳と改題、大正六年二十一號で休刊（此等の後身が娘々廟）

川柳文學　第一輯（同十月一日）　東京、日本橋川柳文學社、坂井久良岐主宰、大正二年元旦第三輯を出し、休刊

歴史と川柳　全一冊（同十月二十日）　大野露草編、岐阜市西濃印刷株式會社岐阜支店刊

柳の友　第二號（同十月十七日）　横須賀逸見三六〇佐藤逸見仙氏主催、創刊號不明・四號より「柳友」となる、大正二年十一月一日八號を出し休刊

川柳カンシヤク玉　第一號（同十月廿三日）　東京、日本橋區橘町川柳八將會、署名人大野茶喜次　四號で廢刊

川柳選（袖珍名著文庫第五十編）　全一冊（同十月廿八日）　東京、神田富山房發行・芳賀矢一校訂

百八集　全一冊（同十月）　東京、京橋八丁堀都會・四六判和紙

鯱鉾　第一號（同十一月一日）　名古屋、中京川柳社、明治四十三年十月發行の「柳」の改題、昭和七年十一月號限り廢刊

デカ味　第一號（同十二月五日）　東京、白楊會、深川の大藤治郎編輯、新聞一頁の半截位

東開庵句集　第一編（同十二月廿八日）　横濱、長者町九丁目吉田方東開庵發行

川柳集　全一冊（大正二年癸丑一月五日）　東京、神田小川町國民文庫刊行會、菊判七九六頁、柳樽初編より四十五編まで收載、立派な本、中根淑の前句源流を載す

番傘　第一號（同一月十五日）　大阪、番傘川柳社、昭和八年一月より菊判

風　第一號（同一月廿五日）　松山市出淵町風會、四六判、大正四年七月十二日第廿九號で終刊

六華　第一號（同一月）　金澤市安川久流美主宰、第六號より「礎」となる、礎の後身が「百萬石」といふ次第

川柳雑句類解　全一冊（同二月八日）　東京、日本橋博文館、西原柳雨編、菊半二六六頁

へそ茶　第一號（同二月）　京都、我武者會、菊半横、東京のカンシャク玉式のもの

糸柳　第一號（同三月五日）　東京、神田柳町野々垣方糸柳社、編輯栗林古雅、菊半截横、六號を出して廢刊

互撰　第一號（同五月十五日）　東京、神田猿樂町川柳互撰會、謄寫版、半紙八枚、四號限り

反映　一號限（同不明）　靜岡縣引佐郡鹿玉村伊藤馨、謄寫版「互撰」の五號に當る

粹狂　第一號（同五月十五日）　東京、京橋萬友會、大正九年八月廿一日第八十號限休刊、大正十一年元旦復活一號發刊、翌年六月十九日十五號を出し廢刊

とも　第廿回（同五月十六日）　東京、京橋三巴會、大正三年七月五日廿四回で休刊　第六號

礎　（第六號）（同七月十三日）　金澤、西町藪の内北都川柳社、十六號で廢刊、礎は六華の改題せしもの、後て六華は五號まで、號數は六華のを踏襲

川柳膝栗毛　全一冊（同九月五日）　東京、日本橋本町博文館、西原柳雨著、菊半截四四二頁

川柳卯木句抄　全一冊（同十月一日）　名古屋、中京川柳社、高木好風編、四六半截九四頁

仔熊　第一號（同九月）　札幌？熊のへそ、ホツク、アツシ、鎬矢と名が變つて行く

川柳塔

路郎選

麻生葭乃

住吉の馬と生れず馬力曳く

ゼンマイのゆるむ女給は出る覺悟

雨、雨、雨バーも淋しきアスファルト

夫婦喧嘩たえぬ門構とは見えず

せいのない相槌ながら愚痴を聞き

おつと逃すまいと魚屋聲をかけ

サラリーマンの奥様らしく包ませる

増位汀柳

夢まで浮世の波にもまれゐて

一生の浮沈わづかな金の事

處女でゐる女給へなんのかんのとか

せめてもの命日だけは家に居て

日に焼けた腕は尊し力あり

同僚に頭を下げて無事にゐる

給料は上るものとは思はねど

燗冷めもおし頂いて呑みませう

内閣がどうのかうのと散髪屋

西田艸樂

母の汗兒の汗きれいな水都祭
突出しの辻占がいゝ夜を更し
石燈籠いよ〳〵裸の夏が來た
子を產まぬ乳の丸みの魅力です

主幹に貰ひし蝎

お前から江戸川亂歩の顏が浮く

生田翠夢

人の世のうたゝ冷たい事ばかり
宿命論妓の唇のいと薄し
候文女の心そのまゝに
情炎の消ぬべき君にあらざりき
寂滅爲樂心中を仕ぞこない
諸行無常うたてや風呂でみまかりぬ

山本雨迷

冬ざれの庭に兒を寄せ陽をたゝふ
霜やけの掌にとるみかん轉げ落ち
氷雨する硝子越なる兒の寢顏
やるまじきは兒にそ吾が手のたなごゝろ
冷たきは鋪道夕べに不慮動く

○

須崎豆秋

夜の蜘蛛二階の人に來て貰ひ
居殘りをして天井の蠅を取り

天王寺公園に、故池上市長の銅像建つ、新世界、今宮、釜ヶ崎を眼下に睨睥し、高さ日本一なり

高すぎて、大阪中のアラが見へ

愛犬ポス

けなげにも家主の犬を嚙んで來た
十錢に負けても買はぬかと怒り

平井興三郎

酒癖の一ツ圓タク弄る癖
朝風呂へ女給の妻を意識する
一萬圓貯めたインチキホテル業
朝寐つゞいて家賃の心配されるなり
妾宅で行水だけをして歸り
狂人のさまよう海も夏となり
財布ぐち貸された金に手が出せず
香煙はやはりお金がよいのなり
私きり妾はさせぬ貯金帳
つきつめて死の湖が見えてくる

青木史呂

凡そ讀む氣にはなれない本を呉れ
腕時計買つてあげますホテル灯
うそついて子供に頰を叩かれた
靈魂の不滅を論じ眠らせず

西村明珠

女給です女給ですとてすねてゐる
逆境のこの夏汗をかくばかり
鯉のぼり一丁先きへ自慢する
眞面目にもなります金がない時は
もてなしの始め主人の手で酌がれ
ウエトレス眞面目くさつた日は涙
看護婦の部屋は笑ふてばかりゐる
嗚呼とつけ足して名高き湊川
母親が出て行た後の雲を見る

後藤青兒

淺間しい姿人間簾を引く
折鞄腦みもつめて重い事
活字まで小さくされて退職す
寫眞を撮つて置かうと思ふそれが淋しい
キヤツチングボールもしてゐる資本主

奥野禿山

何日の間か賣れてるらしい骨董屋
拾圓の紙幣が持てない上機嫌
俗名のまゝで悲しい蜜柑箱
がらくたの數は世帶を物語り
律義者眉も動かぬ呆けた顏
おとなしうなつたはやつと五十歳
男子部は晝寢して居る紹介所
自動車の中の手錠は悪びれず

姫田夕鐘

氣性のまんま受話機を掛けたる
我が影が酒場に伸びてうらさびし
庭石のひとつひとつも先祖です
荒海へけろりと月が顏を出し

妻病みて

早や蛙が鳴きますと妻は病み

水谷鮎美

白足袋の酌婦は運の強い星
黄金萬能坩堝に消ゆるこゝろかも
片おもひ赤とんぼをば寂しみぬ
朧夜叉の繪がすきな妓の厚化粧
さびしみをみたすにしろき北斗星
金策につかれて犬の死をみつけ
緣談のむぎわら帽に風があり

喜多春秋

五月晴都會の空はアドバルン
蒟蒻の様な肉體、賣笑婦
顏と心とつないでおかし又憎くし
あゝこの若者もわが失敗の道にゐる
死顏は意地を通した五十年
佛具屋に佛長らく在はしまし
勉强を野心と云はれ云はしとき

大鶴喜由

ひとたびは失業もよし角がとれ
かくももろき首であつたか五月晴
けるなぐる位承知のきれ話
商人に向かぬ實直さを案じ
爲にいゝよりも儲のいゝを賣り
わからぬ嘘ならつけ〳〵と云ふ
五十圓もとれず結婚適齢期
受付氏異性に甘いあごをなで

中澤濁水

泊つたとしといてくれに狼狽へる
青葉洩るピアノ農夫の鍬の先
墜落の跡をとんびのあざやかさ
母さんと呼びたいのへは父無言
釣竿を貸すに呼吸を添へてやり
その中の處女といふのに蚊がとまり

吉田水車

犬山にて

一と桿に白帝城はみだれたり
今度こそ覺えなはれと三味をとり
御宿へ呼びつけられて待たされる
思ひ切つて笑らへば彼女笑みかへし
宴酣髭の順やら禿た順

夕鐘君へ

君の眼に今はうれしき鯉のぼり

岡田某人

行くてたゞ出勤簿があるばかり
事なかれ主義夜の膳靜かなり
床の夏絹糸草で誤魔化され
添ひとげてみれば話題のない男

ある結婚

高砂や眩しき夢に二人坐す

朝田新水

日本の土地と處女とをはなれる身
佛壇の傍で寢る兒よ風が鳴る
夫とも思はざる日の亂れ髪
名論に料理の味もわすれけり

丘遊舟

バラライカ彈く國境は雪もよひ
閑あれば灰になる日を想ふのみ
鐘遠く遠く見上る山櫻

西いわを

大阪や神戸にも飽き奈良京都
監査役今年も同じ眼つきなり
女學院姉と妹の春は同じ

植山九天

轉勤の噂机の疵をなで
菖蒲湯でうちにも男の子のほしく

福田浮鬼

灯も消へよ時計も止れ淋しい日
謙遜の中に育つて氣が弱し
忘れたら勝てる病と氣付きたり
この人も病氣探して病む仲間

市塲沒食子

抹殺をされそうなので媚を向け
針の尻押して儲けた貯金帳
分引した上に端下もまけさゝれ
人間の垢がたらひの中に浮く

首藤竹楓

齒のぬけたとこが好きとはあんまりな
取り卷きのいやしき笑ひ目の動き
灰皿へ素足がふれる獨り者

宮岡白峯

鹿の足兒の足春の三笠山

大西八歩

我まゝに育ち强氣で世を渡り
花道を出るよな戀をあこがれる
打水の風にはつきりゐる心

熊谷紅

大自然バケツに植えた菊が咲く
キチンと坐れて數字の上手な兒
村會の硬派が二人禿げてゐる

妹尾變人

生活の斷片ガソリンのにほひ
倦怠期とやらを待つ仲の好さ
ハンドルを振りかへらせるふざけやう

岡崎祥月

旅客機よあゝ退屈な六月だ
母の背に夕陽薄く暮れにけり
肩と肩ならべて夏の風を吸ふ

曾我部宵明

麥積んでむかうが見えぬ猫車
改札でサラリーマンの足と知る

妹病む

氷嚢を外すして御輿見せてやり

荒井英賀夫

あまりにも正直すぎて煙むがられ
男には嫁ぎおくれなどなくて好し
商品のように仲人押しつける

明石柳次

梅干の味は日本のものにする

三鴨美笑

大學には入つて母のないを知り

加藤健芳

窓の月風と一緒に流れ込み

粒々集

長崎　柳秀

御祝儀を出すが幹事の役じまひ
ランドセル姉のひろげる傘へ入り
苦勞とは思ひませんと縫ひつゞけ
表札屋明智光秀などならべ
いさゝかの事にこだはる父の醉
すなほなる若さの慾しい嫁ぎ遲れ
生者必滅何んの豫防かマスクかけ
子を抱いた時のお辭儀は腰に出し
人の顏見ると遲斷機降りたがり
貧乏につけては思ふ父の腕

大島　濤明

學歷あたら徒食の運となり
眞實向へば鈍力ばかりなり
掌の中へ今日働いた丈けの金

柳風スポーツ

森　東魚

スターター藥局を出て遠からず
命を待つ奴隷の姿位置につき
スタートに二つ玉とは禁句なり
繼つ子のやうに砲丸隅で濟み
まだパスにしてるヂヤンプの一と器量
これでもかとはピンポンの叩きやう
盜壘と睨んだキヤチ斜に構へ
審判の念頃ぶりは地にも逼ひ

月評　街の高臺

麻生路郎・西田艸樂
山本雨迷・増位汀柳

最近いろ〳〵な事情から、月評の集りをする事が出來なかつた。閑生、艸樂、水車の諸君に句評を別箇にして貰つてゐたが、矢張り月評は集つての各自の意見を忌憚なく披歴するに越した事はないので、今夕、雨迷、汀柳、艸樂と僕が事務所の樓上に集つた。（路）

路郎＝先づ「近作柳樽」の中から、神戸の蘇堂君の

名論に結末がなく酔つてゐる

から初める事にしたい。

大した技巧もなくて、何處でもぶつゝかる樣な事柄を詠んでゐる作者の手腕を嬉しくおもふ。

艸樂＝一種の酒癖でもあらうさまが、よく表はれてゐると同時に、作者の冷やかな一瞥が見逃せない。がつちりした句だ。

路郎＝この作者は艸樂君が云つた樣に、傍觀的態度で句をまとめてゐる。

見送りへ邪魔くさそうに顔を見せ

なども、同樣の手法である。傍觀的態度は熱も無くて句が凡化し易いが、如上の句はそれらの弊を逃がれてゐる事を思はせる。

路郎＝大門君は、益々句に冴えて見せてゐるが、いつも引つ張り出されてゐるので、次に今治の一風君の

人格と別に渡した運動費

に移らう。

雨迷＝この句は、社會人としての世の中に鋭くメスを當てゝ觀たもので、人間的に社會を見たと同時に作者の人格も、この句の中に織り込まれてゐる樣に思ふ。

艸樂＝この句は、處世術のデリケートな點を捉えた處に作者の意が働いてゐるが、多少晦澁な處はまぬがれないものがありはしないか、然し斯う云つた句はそのデリケートな處が味であつて解剖しない方がよい。

路郎＝句意は雨迷、艸樂兩君の批評でお判りになつた事と思ふが「何々と別に」と云ふ叙法の「別に」は古句の中にも相當使はれて

ゐるし、現今でも可なり使はれる樣であるが多くは「別に」でも何んでもない句の場合に使用されてる事が多い、然しこの句の「別に」は生きて位つてあるから、玩味して「別に」の使用法を無闇味に使はない樣に考へてほしいものである。常套的な使用法は句を殺すと云ふ事を深く腦裡に止めて頂き度い。

次は京都の丁路君の

パンクして呑ん氣な人に取卷かれ

路郎　第三者から見れば すこぶる朗らかな市井の一風景を詠んだ句であるが、この句をぢつと眺めてゐると、人の氣も知らないでと云つた當惑した運轉手の人物が大寫しで、描出されてゐる、寫生句としての手腕が頷かされる。

艸樂＝別にたくまないで なだらかに詠まれてゐる處は、作者の老巧さが見逃せない。

雨迷＝この句を詠んで、こんな事を思つた活動寫眞へ行けば人が一杯やし、動物園へ行けば人が一杯やし、何處にも一寸したとこでは皆んな 時間のある人が多い。こうした人々に接する度に世の中は 何處で誰れが働いてゐるのかと思つた事が何度もあつた。 眼の前に出てくる人が 皆んな遊んでゐる樣でその遊んでゐる事が 社會の間隙で働いてゐる人の調和を 何處かで取つてゐるのであらう。

路郎＝成る程面白い感想だね、然し一方から云へば大體の人間は このパンクした方の人生の苦楚をなめつゝあるのも事實だ。 働いてる人はいつもさう感じるだらう。

次は高知の星水君の

副業に彼是迷ふ畑を打ち

艸樂＝農家の心情は 斯う云つたものであらう。 耕しても作つても畑は畑だけの性能である、何か副業によつて別途收入を得なければならない。 むしろを打つか麥藁を編むかどちらが有利なのか迷つてゐ乍ら、矢つ張り畑は耕さなければならないのである。 さう云つた複雜な感情を この短詩に盛つた功績を認めたい。

路郎＝善良な 地方農民の心を代表して叫んでゐる、農林大臣に贈つてあげたい、愚劣な政黨の人々も この句を玩味したらいいだらう。

雨迷＝この句は着實性と眞劍味と それから純情さを兼ね備へた句であるので、おのづから作者に敬意を表さずには置かれぬ。

汀柳＝この句は農家の人にのみ限らず 都會に住んでゐる人々にも 斯うした心境に在つて、みじめな自己の職業のあきたらなさに彼是と迷ひ結局は 默しつゞけてゐるのを多く見うけるものである。

次は花鳥君の

エプロンの後を見れば紋羽織

艸樂＝國防婦人會なるものゝ趣旨は 誠に結構である、然るにこの句が云つてゐる樣に殊勝らしくエプロンをつけて 街頭に進出した會員なる者が、そのエプロンの下に麗々しく紋服を着用に及んで、さながら美服の展觀をされてゐる樣な事がみうけるのである。私はこの句に依つてそのエプロンより、紋服より、今一枚人間の皮を剝いでみたい氣がする。

路郎＝穿ちの句としては、なる程と頷づかせるが、詩情は乏しい、 國防婦人論が出たが國防婦人と云ふものは 齒磨の宣傳が朝だけで足りずに 寢しなに宣傳してゐる樣に、親父の懷ろを正面から攻める代りに 裏から攻擊してゐる道具の樣な感がある、だからエプロンで紋服をかくしてもいゝ、その階級をひつぱり出されば、本當の仕事が出來ないのだ この現象は この句を殘してやむを得ない世相として見送るより仕方がない。

雨迷＝作意は國防婦人會の 堅實な發達を希つてゐる事にあると思ふ、それで偶々紋羽織とエプロンの人に接して 啄嘆をしたものであらう。

汀柳＝國防婦人を詠んだ句に「飯は子に炊かせ國防婦人會」(青兒)があつたが、それと句意は同樣であるが、この句はエプロンと紋羽織の對照によつて 更に國防婦人の矛盾を指適してあまりがある。(汀柳筆記)

戯作
謡曲

没句供養

艸樂　作

【能柄】　三番目

【人物】　ワキ　作句者僧、シテ　没句亡靈女　ツレ　没句多數男女

【時】　七月

ワキ僧　これは村崎野市井院に住ひする僧にて候、吾れ近年没句數を積み、憐れ句主の悲情耐へざるにより、一日經書いて弔はゞやと存じ候

「敬つて申す。没句供養の事、右非情淺感、晦澁不味の句と言へど、一度句箋に上り、空しく没世に沈淪せり。就中選見相違の爲不幸泡沫の身となれるものなしとせず。願くば經文の功力により、成佛せん事を。南無没句頓生菩提」

シテ女　腦裡に燈す詩歌の燭、光失せし闇路を如何にせん。げにや着想不燃の時は捨つべきに、その心更に執心の、邪道に惑ふはかなさよ。

ワキ　不思議やな積みし句箋の間より一葉抽け出でしと見えつるに、恨めし氣なる目つきにて、女性一人現はれたり。汝は如何なる人ぞ名乘り給へ。

シテ　名乘れとはあまりに情けなき、吾れは先年、天王寺なる境内にて、お僧に逢ひし女性にて候が、その時しげしげとうち眺められ、句帳取出し何やら書き記し給ひしを忘れざるに、如何なる者ぞとは、早忘れ給ひしや。

ワキ　や、思ひ出でたり。あの時の女性にて候か。

シテ　春の彼岸の初日の詣で、境内雜沓の中に　、幼兒を抱き、亡き夫の戒名を持ち、あまりの人込みに進みもやらで佇みけるを、お僧は何と思ひ給ひけん。その後程經て

此のあたり未亡人住むと覺えたりの句世に出づ。如何なれば彼の時の態詠み給はで、彼樣な句を詠み給ひしぞ。

寡婦となり、幼兒を抱き、せめては亡き人の、跡弔はんと歎難の、一日の態をものし給はで、或る日町の路地口にて、逢ひし時の事のみ句に現はれしは、世の未亡人の如く淺ましき者の樣なる句にされしが、口惜しく候程に、恨み申さん爲め現はれ出でしなり。

ワキ　今思ひ知りたり。御恨みもつともにそ候。彼の時の態句には詠みたれども、想拙なくして沒句とはなれり。

戒名に涙新らしき春彼岸

正しくお事がことを推量申したるも、選者の目に留まらざりしは、作者の未熟と思召され、ひとへに諦めたまへかし。

シテ　その御言葉無理からねども、吾等同樣沒捨に逢ひし者の數知れず候へばそれ等のものを打ち伴ひ、再び今宵現はれて、御弔ひに預るべしと、言ひしと見えしが忽ちに、かき消す如く失せにけり

「待謠」ワキ　歲月を、ふるき柱の持佛堂、香華床しき寂光の、妙に照せる法の道、心からなる聲ともに、此の御經を讀誦する、此の御經を讀誦する。

（後シテ女ツレ男女多數出で來る）

シテ　あらありがたの御經やな。あらありがたの　御經やな。唯今　讀み給ふは比喩品よのう。その御經のありがたさに亡者となりし沒句ども、うち連れこゝに出でげるぞや。尙々御經讀み給へ。

ワキ　げに比喩品は法華經の妙文にして、生ある者はこれを聽き、火宅の門を出づるなり、ましてや沒世亡靈の、菩提に歸らざる事あるべき。

シテ　なかなかのこと、火宅は出でぬさりながら、詠み置く十七文字の姿も化して、歌舞の菩薩の粧にて、

ワキ　なほ此の寺に薰ゆる香華、

シテ　出づるは火宅。

ツレ　われも、われも、額に戴く沒の文字、今は消えなん嬉しさに、歌舞を奏でて夜もすがら、お僧の心の慰めん、お僧の心をぞ慰めん。

ク地　春の曙、夏の夕暮、秋の月夜に冬の弱陽、いづれ詩趣乏しからざるに人間の心固くして、花は咲けどもうとみ見る。唄ふ小鳥の聲にも和せず、草葉に宿る露さへも、物憂き顏にて除けて過ぐましてや荒ぶ木枯に、情けも凍え筆硯の甲なき態の憐れさよ、しかるに、たまさか、此の人を見る。殊勝に見えて十七文字、書き連ね書き連ぬれども、時折の、巧拙あるを如何にせん。さりながら、今此處に、佛果を得しめん菩提心、なぞか沒句の浮まざらん。もとより句の、叙法表現着想の、まゝならざればその折に、かゝり合はせし吾等が不幸、今は思ひ殘す事あらじ、生者必滅會者定離、敎主の如來も逃れ給はずば、せめては法の光を得て、成佛得脫せん事の、吾等が身の果報ならずや。

シテ　見佛聞法の數々

「地」　詩情歌魂と人間の、明け暮れ惱み多きとは、一つ心の不離不即、穿ち輕妙諧謔の、まとめ難きは十七字、許させ給へや南無沒句。

シテ　今は早、

「地」　これまでなりけり花は根に、鳥は古巢に歸るぞと、方丈の燈火も、またゝき庭の夕顏の、花も萎まん東雲の、明けぬ先きにと打ち笑みて、ありつる女を先として、一人一人の姿も消えて、鉦の音ぞと聞えしは、巷に響く工場の、鐵打つ鎚の音と代り、いつしか此の夜も明けにけり、いつしか此の夜も、明けにけり。

北澪莊窓話

山本雨迷

私は最近特に苦吟をする樣になつて來た。どんな句も、皆苦吟に終らないものはない位で、一つとして自分を滿たすものを得ることの出來ない苦惱をなめてゐるのであるが、たゞそこに一つの慰めを求めて窃かなる愉悅を恣にしてゐるのである。

苦吟は導く、といふことなのである。且つての私は苦吟の連續であつたけれど最近の如くはつきりと押詰められてはゐなかつた。

川柳はもつと自由な天地に生棲すべきであるといつた氣持が起れば起る程反對なものが意識的に頭を持ち上げてくるので、それを拂ひのける爲めの努力はしてはゐるけれど、そうしたものは決して有効ではなかつた。

而しこのまゝでは所詮行詰るばかりであるが、川柳が作れるから、十七字に纏めて置くといふ氣持にはなれないし、又十七字に纏められるから纏めるのでは川柳人としての資格に於て明に落第だと思つてゐるから、愈々川柳が六ヶ敷くなつてくるのである。

川柳は作句するものゝ氣持の上にたへず動いてゐるもので、其の氣持が動かぬかぎり、川柳作句が出來ないのは當然なのである、たゞ、我々の考へてゐる所謂川柳の行きかたの上に、人各々によつて異つたものを持つてゐる限り、この行詰りを打開することは骨が折れるが川柳人のなやみは實にこの點に集まるのである。

× × ×

其後川柳雜誌の雨迷は何をしてゐるのかといふ聲を聞くこともあつた、事實私自身も成程と思ふ樣な氣持のすることもあつたが、少なくとも責任ある一員としての職責は絶えず持ち續けて來た、たゞ御斷りして置きたいことは、汀柳君が粉骨碎身、柳誌の刊行に努力してゐることで、私自身は、小さいが會社を起こしたが爲めに日夜心勞、この程漸やく會社の將來を見ることが出來る樣になつたから是れから本格的に活躍することが出來ると思つてゐる。

句の方に於いても過古に於ける自選の苦惱は路郎師の選句によつて一掃され其の點に於いても道が開らけたのであるから心眼を開いて御指導を祈つて置く、と同時に昭和十年度に於ける注視柳人、これは多分川柳たまむし廢刊に俱なふ川柳作句の行き方だと思ふ點に於いても路郎師選句といふ安全辨を得てゐるから私自身としては期待される存在でないことをはつきり意識してゐるのである。

× × ×

今日は梅雨の入りだといふ。二階の窓からは貨物車の憂鬱そうな顏が動いて行く、蒸暑いが降りそうでないので、いら〳〵した氣持である。机の上の紙箱の中に繭を出た蝶がつるんだまゝ、じつとしてゐる。子供には見せたくはないとつゝいてたが無茶だと思つた。

うつとしいので左の肩が非常に痛む、濕布を取り代へて見たが同じであつた。思へば災難は何處にあるがわからない、先日、大毎附近の人道を步行中、人道へ自動車が乘り上げ、街路樹を倒したはずみに三人は打ちのめされ、私は左の肩先から腕をしたゝか打たれてしまつた、その痛みである。あの楚々たる街路樹が私達の命拾ひをしてくれたと思へば感謝の念に滿ちるが、街路樹さえなければ打ちのめされなかつたにと、ぐちが出る。

×

街路樹は立たず鋪道に自動車のざんげ

四・國・遍・路（その二）

松山　酒井大樓

三月二十日　善通寺參拜

門番の知く善通寺の乞食此の乞食非常に不遜な奴で女子供と見ると強要をする、惡まれないと一錢の金さへ無いのかと仰せられる。

横着な乞食へ娘顏を伏せ

眞言宗小野派大本山善通寺、大騷ぎをして大本山を贏ち得た善通寺だが、之が爲に吾等として信仰に增減は無い、善通寺はどこ迄も善通寺で有り弘法大師御誕生所として信敬するが大本山たるの故を以て敬仰の念は憎ない、だがあれ程大騷ぎをして得た大本山どこか違つた處が無ければならないと思つて寺内をあちこちと歩き廻つて見る、別に御本尊樣から御光が差しても居ない、ハテ不思議と尙も調べて居ると有つた有つた、本坊の大玄關に盛砂嚴しき門柱に大本山善通寺と六尺に餘る大板一枚これだ、比の一枚の門柱を得たい計りに大騷ぎをしたんだと思ふとくすぐつたくなつて來る。

門標にかゝはりは無い參詣者見る人も無き玄關の大看板

琴平參拜　何時も絕へぬ賽客の數、丁度其の日は三月二十一日の春季皇靈祭で有つた、着飾つた人込の中を遍路姿の我等

埃する中を呑氣な遍路笠

御本社に額いて舞臺に立てば信仰の餘德で賞める讃岐富士が眼前に微笑で居る、繪馬堂へ廻つて見ると納額にちと繪馬堂の狹ますぎる

これ皆航海者の奉納が大部分奉納の碇神にしきむ色

○宇多津の鄕照寺へ泊つた夜です、何と皮肉では有りませんか、其の旅館は料理屋兼業で有つたので何れの馬鹿者か知らないが、二階で藝者を上げての大散財、悲しや此方は遍路の身酒を呑む事さへ遠慮して居る同行唄ふ事も騷ぐ事も出來ないので有るから、じつと我慢して居るとも知らず二階の騷ぎは益々圖に乘つて激敷になつて來る、愈此の儘彼等の蹂躙に委せればならぬかと觀念して居た折しも有れ一隅より御詠歌の聲、得たりと計り合唱する一同

ちいちいはあはあのう……

とやり出した、果ては合の手に鉦を入れる、將に此處散財と詠歌との大競爭、だが二階の馬鹿者共も詠歌の靈驗に怖れたのか、果は歡盡きたのか程なく鳴を靜めたので同行一同顏見合して微苦笑

御詠歌の偉德三味線封じ込み

二階で騷いだのが馬鹿者なら御詠歌で對抗した吾等も亦

御詠歌の尊嚴汚す馬鹿と成り

○崇德上皇御聖蹟の數々を有する天皇寺、白峯寺共に涙を以て御禮拜致しました、殊に白峰山陵に靜まります御尊靈に對しては西行法師の終夜讀經して御靈を慰め奉りしには遠く及ばす共我も遍路の一員同行二人の御一人は大師樣、心靜かに大師樣の御袖に縋り讀經奉拜

尊靈へ回向高祖と二人連れ

○白峯山上の眺め「朕死せば陵を營ぜよ」と御遺詔になつたと云ふ景勝の地、女木男木豐島と列なる鹽飽の島々、實に國立公園たるに恥ぢぬ絕景だと感じた。

絕景と島の向ふの島を賞め

更に此の白峰根來の眺めに續いて屋島の眺めがある、此の邊り俳人ならず共一句欲しい所ざりです、吾等の乏しい詩囊には兎でも入れ切れません。

絕景に足の痛さを忘れけり

絕景と古蹟が招く讃岐の地

○高松、餘りに有名な所であり書するに幾頁かを要する名所の多さ、遍路の乏しき觀察より諸氏の方が遙かに委敷筈　只遍路は只ぶらり〳〵歩るいただけの事

公園の廣さに足が痛くなり位で御免を頂きます。

伊豆大島より

庄　萬よし

一、波浮の港

波浮の港は中着港
　腰のあたりに紐がない
波浮の小池の茶釜の水は
　沸くも早いがさめやすい
（大島節）

五月廿四日大阪市議一行十名は東京港を午後十時に出帆したみどり丸（二千噸）で翌二十五日午前五時に元村港に着いて村の青年の正服接客係三十名程の整列せる小さな埠頭から乗合自動車で野増村差木地村を經て三里をドライブーして六時には名に負ふ波浮の港に着いた。

波浮の港は舊噴火口湖の海に通じて港を形成せるもので、火口特有の絶壁にて周圍を廻らし、港内は鏡の如く靜かに、千五百噸級の船舶を出入出來る。

島内に一つの井戸も泉ない火山岩で、天水を貯つて煮炊きをしてゐるから、入浴ごろ島では贅澤三昧である。勿論牛乳一升十八錢だといふから牛乳風呂はそう贅澤でもない。

米といふものが出來得る筈もない島では男は漁業と女は牧畜（牛及豚）、男女共稼ぎは椿油の製造である。昭和九年度には波浮港魚市場が百數十萬圓の賣上げをしてゐる。バター、椿油の輸出と、遊覽客毎日四五百人といへば島民の財政は東北農村の比較にならぬ裕福なものと見受けた。途中の村でも内地の山村に見受ける豚小屋のやうな陋屋は見出せない。

波浮港三百戸、漁村らしい魚市場の臭ひも太洋の眞ん中だけに神秘的な趣きのある。日中の港内は退廳後の役所のやうに寂寞なものだが、夕方の歸帆を迎えて一時に活氣を呈する。松友館で朝食を取りつゝ島の娘の大島節の洗禮を受けた。

二、火口

間伏から滑走場のレール工事に沿ふて馬上の人となつた。一里の行程二時間で外輪山に着くと、遠く利島、新島を南方に望むの外眼を遮るものもない青海原である。雲か山かと伊豆の連山が見える日もあるそうだ。茲からは内輪山まで十餘町は一本の草木もない砂漠で、噴出して間もない黑い岩石が多い。内輪山火口茶屋で馬を捨てる。火口茶屋と火口との間谷間五丁程は噴出した溶岩が波を打つて凝結した模樣がハッキリ分る昭和何年かの爆發で出來たのだそうな。

經二百米位ひな火口から火口底を望む瞬間ごろ、死の誘惑も起る——、火口底の探險慾も起る。時しも噴火が鎭靜した時だつたから備え付けの反射鏡で火口から二千尺だといふ火口底まで深い大きな井戸のやうに方三尺の鏡に寫つてゐる。鎭靜時と雖も火口底は熔鑛爐の中の熱鐵の如く時に焰を燃やし時に眞紅の波動を漂はせてゐる。

今や地殼の内部を完全に窺ひ見た譯であ

る。試に盆大の石を投ずれば火により周圍の壁に穿き當りつゝ火に底に沈むまで四五十秒を要した。有名な三原山心中も、この四五十秒で敢行せられるのかと思へば、鐵道往生や投水より詩的だとも痛快だとも思はれる東京實踐女學校生徒二名の投身以來、二千名の生命を呑んだと言へば、爆發の焰にその靈があらはれる話も滿更虛言とは思はれない

忽ち爆音あり、數分を出ですして噴烟數千尺、その霧は火口茶屋附近まで襲ひ來て硫黃の臭ひ猛烈さに聊か心中が嫌になつた。

下山は火口茶屋から外輪山の御神火茶屋まで異つたコース十數丁の砂漠を恐る〳〵馬の速度を早めたのは私の馬が競馬から拂下げられたものだつたからであつた。

三、椿茶屋

再び外輪山から全島を見下すと耕地のない椿や櫻や、同人艸樂に見せたいやうな、名も知らぬ熱帶植物で蔽はれた楕圓の島は盆栽のやうに太平洋に浮いてゐる。初めてこの島に流れついた漁夫が、飲用水に苦しみ穀物を求め小島や蛇を友として故山を遙かに望んだのはロビンソンの漂流記その儘であつたらうと想像した。

六合目椿茶屋の山口初子さんといふアンコ(島の處女をアンコといふ)の大島節を謹聽した。アンコの服裝は全島一定した紺がすり細帶前垂れ(大原女の如く廣巾にあらず)名代の頭髮は普通四尺位ひ六尺に及ぶものあり、漆黑の束髮、櫻色の皮膚、白色の手拭を被り。敬語のない訛りでのサービスは男たるもの誰か參らばらむやである。曰く

椿油買へよ、大島節唄ふぞ。
買物は之村まで頭にのつけて行くぞ、
……また來いよ。

初夏晩春の全島は銃聲を知らない、鶯、目白、時鳥、鳶、烏、蛇等の天然動物園である。鶯りとキザと、搾取のない八千の人々は勞働と唄とが生涯であるやうに思はれる所謂近代化が人間を幸福にしないことを島の娘からしみ〴〵と敎えられた。

家傳藥王黃華

主治効能(軟膏)
肋膜、胃腸、神經痛、
リヨウマチ、ぜんそく、

藥價 三日分壹圓四十錢
七日分弐圓八十錢

發賣元 上瀧寶行堂
大阪市旭區鴫野町五六九
電話(94)東三九一一番

各種族
七寶徽章
メダル
カツプ

大阪上六 加藤旗徽章店

川柳雜誌社指定
卓球タイムス社指定

夏のこと

窪田銀波樓

一日の勤めを終へて宅に歸り、一浴に取り戻したわが身を椽先の籐椅子にかけ、すが〳〵しい庭の打水に涼を入れつゝ、冷しビールの一杯を傾ける時、夏ほどよいものはないと思ひます。

苦しみの後の樂しさ、暑さの後の涼しさ、それでこそ、それでこそ

私は夏が大好きです。

父と子

尼綠之助

悠々と、實に悠々と反り返つて歩いてゐる彼氏、彼は傘屋さんである。初夏の町を長男の手を取つて歩いてゐるのである。

父といふ誇りか子を連れた肩の幅

〃おい大將〃と私は叫び度いなつかしさに襲はれたが、一瞬の後には忽ち悲慘な彼の日常生活を思ひ出してうらさみしき笑ひと變つて行く。されど見よ、彼は濶歩してゐるんだ　私は二日經つても、三日を經ても愉快な映像となつて消えない。

交響舞踊詩「マグダラのマリア」を聽く

西いわを

筋はこうである。「モーリス・メーテルリンクの同名戯曲からヒントを得て、作曲者が一つの新らしい舞踊詩劇に書き上げたもので戀と信仰のデレイムマに立つマリアの懺みを捉へ、最後にマリアが戀に打ち克つてキリストに赴く信仰の勝利――靈の勝利を音と運動によつて演ぜられる一種の默劇である。」

此の交響樂は最初から後半迄殆んど曲の持つ美しいメロデーは聲かれずキー〳〵ガチャ〳〵ドン〳〵の樂器の交叉をのみ演奏してゐた　殊にマリアが戀と信仰のデレンマに立つて懺んでゐる時は全くの音の運動としか思へなかつた、此れが此の曲の生命となつてゐるのだらうが斯うしたものは聞く人も演奏者も音樂そのものにかけ離れてゐたと思われる。

一面演奏者も六ヶ敷しい曲を奏された事と

つくづく氣の毒になつた。

（五・二一朝日會館にて山田耕作生誕五十年音樂會）

柳心合掌

水谷鮎美

すぎる六月十三、十四日は大峯登山の講中となり沐浴して、行場・油こぼし、鎖渡り蟻の岸渡り・胎内くゞり等中にも難行場なる西ののぞきをのぞく眞逆まのわが身體山先達の經文に吊りさげられたまゝ合掌して役の行者の尊像（石彫）をおがむ見おろせば暈下百尺二百尺いちめんにしやくなげの花ざかりである四百餘尺に逆とんぼした、柳心無我の境こそ道世の一瞬ともおもはれた。

同行の柳友天野卜居君と洞川の宿での ビールの泡は忘られぬうまいものであつた。

しやくなげのはなへまごゝろから合掌

鮎美

燒なほし

食滿南北

私は最近藥師寺まへの「赤膚燒」へ行つて五百ほど皿を描いた、其ついで主人松柏君から奈良名品の皿を描けと二十枚ばかりつきつけられた繪を描いて拙贄となると、五葉水府、路郎等等の諸氏の句ばかりがあたまへ出て來て、どうもならない私はそれをいろ〳〵に燒なほして描いた陶器だから燒なほしに緣のない事はない、私は多くの場合かうした出たらめである。

金澤へ戻つて

安川久流美

舞鶴の新聞社を辭して再び金澤に舞戻つて既に三ヶ月は經つてしまつた、事務所の方へ轉居を知らさなかつた爲め、川柳雜誌の三月以來を見なかつたが、けふ汀柳氏から五、六月號を態々送つて頂く、暫く何も書かなかつたので、その責をふさぐ可く筆を取つたが、さて之といふいゝ想も浮ばない、山雨樓氏の送別會報を見て何處へ榮轉されたのかとさへ思ふ程に無沙汰、路郎氏の就職は客員銀波樓氏から當地川柳大會の日に承つたのである。

× ×

六月號を拾ひよみしてゐると、あつた〳〵山雨樓氏の「東京から」が之で東京への榮轉も判つた 保土ヶ谷に住つて居らるゝ由、同地は曾て「むさしの」の寺井紅太郎氏が住んでゐた所、川柳人と緣の深い驛ではある中央柳壇の空氣を吸ふ同氏の健康を祈つて置く。

× ×

この間から二度迄知已から「川上三太郎さんは金澤の生れですか」といふ事を訊かれたその度、私は「ノー」と答へて、たゞ同氏がその昔長く金澤に滯在してゐたことを附け加へてゐたのである、その一人は過日遊んだ小松町在の若い詩人であつた、國民新聞社にも勤めてゐたといふから、同社は三太郎氏と萬更關係のない譯でもなし、「金澤生れ」との誤傳はどこから吹いて來た風か、三太郎氏自身の金澤評判の吹聽からとうなづいてゐる。

× ×

六月になつたが北國は寒い、雨のふる日など、殆着に冬の帽子をかむつてゐても敢て場違ひ風俗ではないから不思議だ、この分では單衣にカン〳〵帽の時季も却々やつて來ない、惠まれざる北國人、苺と櫻桃は夏の卓に色彩をはなつても實際、「夏」を思はせるのは七月の聲をきいてからであらう。

信心

高橋かほる選

信心へ物足らぬ日が續くなり　いわを
自我をば捨てゝ座る信心　青兒
信心のわけをきかれた若さなり　三碧
お百度に白い素足がよく似合ひ　烏兎
信心の踏切番と見知り合ひ　美風
失業のゆつくり山門くゞるなり　久米雄
信心のまだ明けきらぬ朝を行き　四五磨
信心のこゝらでいつも夜があ、る　紫陽
繃帶は白し神棚へ燈をあげる　遊歩
お勤の間使は待たされる　禿山
信心へ白髪だん〳〵殖へて來る　菊路
月參りやはり續けて無事に居る　都會人
信心も行きとゞゐてる流行妓　葉光
(佳)信心はいつゞ鳥居の中に立ち　同
(同)夢を見た日を考へる信心家　龍鳳
(同)信心の母を笑つて母と寢る　世香
(軸)信心の宮屋へ八つ足臺をせず　かほる

夕立

生田翠夢選

夕立に素直に過ぎる口も出て　章泉
夕立は豫期しなかつた氣象臺　寒草
夕立のあと爽やかに膳につき　草樓
夕立ちの雲の早さとチンドン屋　墨洲
夕立へ自轉車裸のまんま入れ　正一
夕立に金魚慌てゝ沈んだり　葉魚
尻まくりしたまゝ子供濡れてくる　藤四郎
夕立の最中に街の灯がともり　德三

川柳家戸籍調（續）

（係）　綠雨

（1）姓名（2）雅號及別號（3）生年月日（4）出生地（5）現住所（6）職業又は勤務先（7）好きな句（8）自信の句（9）川柳以外の趣味（10）配偶者子供の有無（11）嫌ひなもの（12）川柳に手を染めた年月

（433）　神谷冬耳

（1）神谷正俊、（2）冬耳龍洞、（3）明治二十七年八月十一日、（4）丸龜市（5）名古屋市熱田神戸町、（6）綿布加工販賣（7）二十年前故今井卯木氏の令嬢が亡くなられた時の喜音家古蝶氏の弔句「緋ぼたんやなんだつてまた散りやつた」（8）永らく冬眠をつゞけてゐる僕、自信の句なんてありませんよ「藪入は貰ひ風呂にも繪端はをり」（9）スポーツ、演劇、食物（10）何もなし（11）……（12）大正三四年頃

（434）　鈴木まこと

（1）鈴木誠元、（2）居眠庵まこと、（3）明治二十六年八月七日、（4）岐阜縣稻葉郡南長森村字芋嶋、（5）岐阜市神明町一ノ八、（6）友禪加工師、（7）咳一ツきこえぬ中を天皇旗、故劍花坊、（8）こうなるも傘で送つた丈け事、（9）繪畫、骨董芝居、落語等（10）女子二人、（11）水菓子お世辭、（12）大正五年秋。

（435）　野本昭四

（1）野本三郎、（2）昭四、荒野行人（3）

ルンペンもぬぎが嫌な軒を借り　正明
夕立の街路に馬車馬だけが立ち　非常兒
夕立をいゝ事にして飲んでくる　忠司
五六丁來濡れてるアスフワルト　都會人
夕立へ叱られた様な顔並べ　つと夢
夕立のひとすじづゝが面白し　水客
夕立にボート沖から濡れて漕ぎ　龍鳳
夕立にかゝわりのない超特急　嵩喜固蘊
夕立の中へ雄々しく母が出る　紫陽
夕立へバツト一ケを買ふ氣轉　不二號
あきらめた様に夕立やみました　耕二
夕立に自働車だけの街になり　三碧

○

夕立へたしか空家があつた筈　曉童
地下鐵を出ると夕立降つてゐる　菊路
夕立の晴れて希望をもつ太皷　綠水生
夕立へビルの姿の無情なり　遊歩

印度洋上にて

スコールに五百羅漢は洵となり　鳥兒作
雨やどり三年ぶりの顔に逢ひ　美代路
夕立へ子の出る傘の大きすぎ　四五磨
あてごともはずれ夕立の驛に立ち　美風
百姓へリヌミカルになる夕立や　義風子
破られた夢に夕立らしい風　久米雄

○佳吟

夕立へ走つただけは損な道　桂林
工面もつかず夕立に逢ひ　紅
夕立へ二人うかつな雨やどり　葉光
夕立の中を號外配られる　いわを
夕立へ虹をまつてる幼稚園　美津女
夕立へ電車みじめに混んでゐる　今雨
夕立へ定九郎と云ふ傘の出る　都留邊
夕立を眺めて傘や傘を張り　德三
夕立かみつむ娼妓の無表情　美稻
夕立が來て二ア人の氣が直り　世間音

○五客

夕立に今日の不首尾を流した氣　青兒
夕立へ毒突いてゐる屋臺店　芳泉
夕立を妾は風呂の中できゝ　都留邊
夕立をかこち愛の巢宵をしめ　世香
夕立に中途半端な店となり　美風

○人

夕立のさはぎ無心を言ひそびれ　禿山

○地

夕立へ一ぺん仕舞つた紙芝居　靜波

○天

夕立が晴れて本意なう妓と別れ　世間音

○軸

夕立は止んだが將棋まだすまず　翠夢

明治三十七年四月十五日、(4)東京深川(5)深川區平井町二ノ七(6)會社員(7)大くらべ手を和らかに提て居る「武玉川」深川の伯母をたづねる橋ばかり「山門」(8)鬼瓦その頭なを梅雨に濡れ、ほめられた後ろ姿も君のもの、(9)劇、猪口の蒐集(10)妻、一女有、(11)寒さ狡智(12)昭和三年一月。

(436)　安岡翠洞

(1)安岡楠喜、(2)浦戸庵翠洞、(3)明治四十四年九月十一日、(4)高知縣安藝郡田野町字大野、(5)高知市北浦戸町七(6)運送店、(7)眞直に歸れば家の灯が明い(紫雲)ものおもふ凡ゆる中に兒をおもふ(松窓)、(8)報國の二字に一家の氣が揃ひ、肉を燒く窓に都會の裏表、(9)野球、(10)妻有り男の子、(11)ナシ(12)昭和八年一月。

(437)　島紅石

(1)島博一、(2)紅石、紫閑洞、(3)明治四十年十月二十日、(4)横濱市、(5)横濱市神奈川區淺間町一(6)米穀商(7)澤山あつて上げきれません、特に新星會御連中の句が好きです。(8)大威張で短冊へ書ける句がいまだに一句もありません。(9)讀書最近やせてゐすますが聯珠(10)この秋に來ることになつてゐます。(11)相當潔癖なので隨分あります(12)昭和六年三月。

柳界展望

全國川柳界のこと、各地川柳家の一擧一投足をこの展望欄ですぐわかる樣にしたい。皆樣の御通信を歡迎する。

【大阪】▲本社螢ヶ池支部は謄寫刷柳誌「篝火」第六號を發行、內容二十頁何れの頁にも清新の句が溢れてゐる。▲山本雨迷君（本社總務）は五月三十一日夜不慮自動車事故に左肩を痛められたが、漸く快復された。▲森東魚氏（本社客員）は今般株式會社間組へ勤務された、大阪市北區中之島朝日ビル七階▲橋本綠雨君（本社編輯局）は六月一日泉州犬鳴山へ「夏の日を離れともなし犬鳴山」二日朝日俳句大會見學に奈良へ二十日金澤へ。▲本社螢ヶ池支部句會は六月二日に開催。▲庄萬よし君（本社同人）の主宰さる大阪無產者新聞は第六十三號より「大阪都民新聞」と改題。▲生田翠夢君（本社同人）は六月九日播州瀧野へ「飛鮎の命の程ないとほしみ」。▲本社大鐵局支部の六月句會は十三日午後四時より大鐵倶樂部で催す。▲本社玉造支部六月句會は十五日日夜岸男前製造所に於て催す。▲本社御池橋支部六月句會は十八日夜、日本樂器會社で催す。▲大阪川柳倶樂部の六月句會は十八日夜同倶樂部で催す。▲番傘川柳社は今般岸本水府氏獨立事務所を開設されたその一室を同社事務所に當られる、大阪市北區堂島北町一六、（電北五八八五）。▲木村半文錢氏は六月十六日より大阪朝報紙上に改訂「千日前今昔史」を連載さる。▲森立名君は今般大阪堂ビル五階の撫順炭販賣株式會社支店へ轉勤、自宅も大阪府三島郡吹田町高畑一三五へ移轉さる。▲奥野秀山君（本社同人）は六月二十三日伊勢參宮へ「七五三繩がないとわからぬ夫婦岩」▲後藤守一君は大阪市東淀川區豐崎西通二丁目一〇へ轉居。▲林墨洲君は住雄と改號。▲袖山千鳥君は群鳥と改號。

【東京】▲長野榮二君は個人句集「へぼきうり」三の卷を刊行された。▲河柳雨吉君は「句集柳風雨調」を刊行、作品三三三句、菊半判一三〇頁、價五十錢、淺草區壽町三ノ一四川柳おもひで吟社で發賣。▲寶グループは花戀坊、祐助氏等を迎へ謄版刷句報「川柳寶」を發行の由。▲小林平吉君は東京市王子區志茂町一ノ八八七へ轉居。▲藤田珍茶坊氏（讀賣新聞社）は六月一日午後九時、逝去された謹んで哀悼す享年二十二才。▲川上三太郎氏主宰の「川柳研究」が六月で六十號を數へたので十六日創刊五年記念句會を神田區松枝町の松月で催され出席者百三十八名の盛況であつた。▲井上劍花坊句碑建設基金募集は〆切七月十五日に延期、一口五十錢（口數に制限なし）本社事務所に於ても取扱ふ。▲前田雀郎氏（本社客員）

は東京市淀谷區代々木初臺町七一五へ轉居。

【京都】▲川柳叢書刊行會より、「醍醐味」第一輯が發行された。裝幀は和洋綴で唐紙の中味を用ひたもの、會員組織で事務所は京都市松原千本西入。▲川柳街では六月句會を十五日夜四條繩手仲源寺で催す。▲大阪日日の姉妹紙として創刊された「みやこ日報」に柳壇が新設された。▲井田ひろ子さんは内田と改姓京都市衣笠天神森町七九一ノ一八轉居。

【兵庫】▲「丹波柳壇」氷上郡柏原町の丹波新聞社より依囑された選者西田艸樂君の努力により投句家の激增を示し丹波柳壇前途を期待されてゐる。▲川村觀月君は尼ヶ崎市灘波新町一丁目一二五へ轉居。▲水谷鮎美君（本社同人）は六月八日夜行て出發、永平寺、東尋坊、芦原溫泉へ巡遊「海女もくる東尋坊の波白ろし」、十三、四日大峯登山へ「のぞき岩眞逆まの下界也」。▲尼ヶ崎住友伸銅鋼管川柳同好會は六月二日箕面へ吟行。▲長崎柳秀氏（本社賛助員）は六月五日より大阪朝報紙上に改訂「川柳談」を連載さる。▲喜多春秋君（本社同人）の長女ノブ子さんは六月二十二日長逝、讀んで哀悼の意を表す。▲梶川楚堂君は蘇堂と改號。

【愛知】▲吉田水車君（本社同人）は名古屋轉任も早や三ヶ月を經たので愈々中京柳界に活躍を期してゐられる。

【岐阜】▲川柳これがれ吟社の七月例會は十五日夜神室町ツバメで催す。

【石川】▲安川久流美氏（本社客員）は五月三十日復興の小松町へ出張。自宅を金澤市十日町一六一へ移轉。▲窪田銀波樓氏（本社客員）は金澤市高岡町上藪ノ内一八へ轉居。

【島根】▲本社支部大地吟社の山内風愚君はプロ食堂川柳亭を開店、その記念川柳句會は六月七日に盛大に催された、▲本社飯川第二支部大地吟社より「大地」第十七號が發行された。

【愛媛】▲今治の武田紫陽君を中心とした謄寫刷柳誌「川柳みすか」六月創刊號を發行・七月十日より一週間今治市本町一丁目高ちゝぶ店内で全國川柳作品展を催すと。▲今治氏報附錄として昭和九年度「今治柳壇自選句集」が發行された。曉童・宵明・心府・小樓・紫陽・十靜・文庫・一風・喜純・小松・泊汀の十一氏の力作がある」。▲今治の原田一風君は近く四國巡拜の旅へ

【福岡】▲川柳くろがね吟社の七月句會は六日夜八幡市大藏三條一の角南禾乃方で催す。

【福島】▲大谷五花村氏主宰の「東北川柳」は七月第百號に當るので記念號を發刊、諸名家の、「百に因む」「川柳生活何年」の特輯を編まれる。

【青森】▲海峽親善川柳大會は青森の不凍人函館の晟修兩氏の協調により八月十一日の豫定で青森市に開催のプランが作製されてゐる、▲青森川柳社の「川柳隊」は七月で三週年に當るので記念號を發行する。

【北海道】▲田中五呂八君は「氷原」廢刊以來病床にあつたが最近快方に向はれ川柳の爲めに再起を期してゐられる。

【朝鮮】▲蛭子省二氏（本社客員）は病癖に親しみ乍らも近日武玉川二篇完結研究濟となり直ちに三篇に着手の準備をされてゐる▲正木柳建寺氏は京城府林町二五一八轉居。

各地柳壇

いのちある句を創れ

路郎・汀柳・艸樂・整理

投稿清規

一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
二、文字正確明瞭に記載すること
三、開催月日及場所記入のこと
四、締切は毎月末日とす
五、投稿先は本社事務所

本社六月句會

六月十日夜　於川柳雜誌社會館

靜かな本社の川柳會館で句想を練らうといふ眞摯な川柳家のみが集つた、路郎主幹は「實感と空想」と題した作句上に就いての有益な講演をされた。今回より兼題天位賞として路郎盃を授與する事となり結果、第一回路郎盃は川村觀月君が獲得その光榮を擔はれた。（與三郎、汀柳記）

出席者　路郎主幹、東魚、史呂、音兒、德三、破蕉、つと夢、夢裡、詩與一、句太夫、千鳥、大山、綠雨、柳笑、春光、角嵐、世間音、住雄、亂耽、艸樂、努輪句、鮎美、みつる、觀月、鳴野、春秋、いわを、紫石、白柳子、變人、源坊、雨迷、默平、彩泡、葉平、翠夢、與三郎、汀柳

互選與三郎被講

席題　机

駐在所机ぬぐつて事情聽き　破蕉
カルモチン机の下の夜の深さ　角嵐
子の机夜は内職する机　鴨野
雨しとゞ宿の机のひくすぎて　詩與一
卒業へ机の傷は親しまれ　千鳥
かくれんぼ机の下で聲がする　青兒
机拭き乍ら隣と月曜日　春秋

席題　茶漬夢裡選

茶がぬるい茶漬レヂスターいがしゝ　德三、
茶漬する朝の格子へ日がまぶし　いわを
お茶漬けをかき込み嬉しいあてがわり　鴨野
辛抱をする氣茶漬をたべてゐる　觀月
茶漬すき米はいゝのをとつてゐる　春光
氣易さの茶漬に向ふ君と僕　史呂
久方の友と茶漬のさんまなり　紫石
信心の父は茶漬で悲なし　つとむ
醉醒へ茶漬の音は大き過ぎ　千鳥
借りに來て待てば茶漬の音がする　源坊
いゝ酒にされて茶漬にむせてゐる　角嵐
偏食の兒のお茶漬を母叱り　世間音
みんな揃つてお茶漬の笑顏　雨迷
斷髮の茶漬を食ふたとは見えず　句太夫
お茶漬が愉快に通る健康美　青兒
出世して茶漬の味へ遠くゐる　住雄
奈良漬の味をほめ〳〵茶漬なり　彩泡
禿げて肥えて茶漬腹一杯喰ひ　破蕉
お茶漬へ重役さんはバツカード　同
心配も無く茶漬の水入らず　柳笑
茶漬のうまさへ朝を笑ひ合ひ　同
ぶゝ漬へ角のラヂオは三疊打　變人
本心を聞いた別れの茶漬めし　同
（佳）鯛茶や〳〵と舞妓を連れて來る　東魚
（同）保釋が許りてお茶漬の味　正光
（同）呑みすぎたなとお茶漬思ふ也　綠雜
（同）外國に居てお茶漬を戀しがり　千鳥

(同)茶漬かきこむで教師を輕んずる　亂耽
(同)大阪の庭の水みる鯛茶漬　鮎美選

席題　雷　鮎美選

雷がやんで佛説阿彌陀經　亂耽
雷が大阪城の上で鳴り　同
雷を眞上で鳴つたかと思ひ　源坊
雷へピーゥあるだけ酌きこぼし　德三
遠雷をきく故郷のポプラ搖れ　與三郎
雷へ燈明の灯が動かない　變人
雷はネオンの街をおびやかせ　世間音
雷のあとの二人へ虹が出る　春光
朝日ビ　から雷の落ちるを見　正光
雷を怖がらす兒が出來て夏　白柳子
(人)雷を見て　と子供裸なり　柳笑
(地)雷の中に屆いた下駄と傘　源坊
(天)雷は乳のあたりをおさへさせ　變人
(軸)雷のあと夕顔のほな白ろき　鮎美

席題　汗疹　春秋選

汗疹の兒ふえるとアツパツパふる　破皷
內職に汗疹の子がすがる也　綠雜
有閑のマダム汗疹に苦い顏　夢裡
目的は汗疹を治す海へ行き　彩泡
汗疹へ論議のつきぬ若夫婦　紫石
汗疹　ぶつ〳〵　子供等元氣　みつる
二女三女汗疹を出し夏痩や　鮎美
パスガール汗疹の襟へ砂をあび　東魚
折袍汗疹の汗をふくビール　觀月
汗疹など苦にもしてない子の遊戯　世間音
蚊柱に汗疹の顏の白いまゝ　角嵐
(佳)夕顏へ汗疹が白ふ抱かれて出　德三
(同)汗疹から最う大阪の夏祭　青兒
(同)汗疹出してマダムしごけな肥り　住雄
(同)子のあせぼ親のあぶぼの天瓜粉　鮎美
(同)汗疹の子日向歩いて叱られる　史呂
(同)汗疹の子見知ら人にいたはられ　正光
(同)盛裝で出て汗疹などこしらへる　白柳子
(同)ギヤ〳〵と泣けばあもゝふへなり　みつる
(秀)汗疹の子走りごつこはやいなり　變人

席題　祈り　亂耽選

赤嬉にも祈る心を持ちあはせ　翠石
一日の疲れ祈りへ熔けてゆき　紫石
キヤラバンの祈り砂漠に陽が落ちる　史呂
お祈りを濟まし時計のねじを卷き　千鳥
蕃人の祈り賬が過ぎて居る　春秋
寢る時の祈りおさなきもの二人　德三
默禱へ小鳥は籠で啼きしきり　詩與一
お祈りのこゞも上目で鳩をみる　葉平
瞳をとじて祈る心の灯しびに　變人
祈り居し眼あくれば灯がゆらぐ　久流美
全快を祈つて冷えた酒を呑み　東魚
お祈に心足る母羨ましし　源坊

席題　血　路耶選

輸血する間をセコンドの音　角嵐
血の魔術こゞもは親に似て生れ　春光
血の色も日本と云ふ强さ　史呂
名人の血統を引いて出奔し　與三郎
同じ血で斯うも判事を手古摺らせ　源坊
一寸した血はなめて置く大工の手　白柳子
外科室は血へ表情もなく動き　德三
血統のことばかり言ふ女親　正光
童心の泣かればならぬ鼻血なり　清美
えらい血でしたと踏切からもどり　彩泡
不孝だつたせめてもの詫輸血する　千鳥
血がかようてはおらんのあぶぼの第三者　鮎美
運轉手せめて輸血を願ひ出る　艸樂
大日本帝國軍人二等兵の血書　春秋
大患の靜けさ輸血シーンなり　同
血相が變る夫を信じ切り　同
血緣は滿洲國の政府に居　同
(人)血緣を輕れど輕りなき返事　同
(地)爭へぬもの血筋だと酒の事　東魚
(天)血を分けてゐるおもしさ膝へ來る　觀月

本社同人會（大阪）

六月四日　於事務所　增位汀柳報

兼題　長襦袢　路耶選

長襦袢あいのこ辨を食べに起き　豆秋
長襦袢つめをきるのも姿なり　かほる
長襦袢一枚部屋を派手にする　史呂
あの頃の憶出もある長襦袢　汀柳
長襦袢あまい男と見込んだり　艸樂
長襦袢いつそ男がてれくさし　同
長襦袢よほど待たして顏が出來　同
(人)長襦袢女の罪を知りつくし　汀柳
(地)長襦袢本氣で聞いて慾しいな　豆秋
(天)長襦袢女は風邪を引かぬもの　艸樂
(軸)長襦袢廊下の端の端へ消え　路耶

川柳雜誌社　螢ケ泡句會（大阪）

五月五日　於三號館娛樂室　綠紅報

兼題　カメラ　詩與一選

(佳)感傷な男十六ミリを持ち　靜太
(同)默々とカメラを廻るラブシーン　六朗
(同)椿背にアンコカメラへ只笑ひ　節子

(秀)葉櫻にかぶき役者が持つ〻イカ　緩　紅
(軸)はいえんぐ小型カメラの値をはこる　詩與一
兼題　郵　便　美選
(佳)代筆の郵便ちちはは　さち
(同)郵便夫つゝじの丘を下りてくる　史　呂
君　逝　く
(同)封切らぬ郵便物へ眼を落し　同
(軸)封書おもたく姉のぬれぎぬ　鮎　美
兼題　ビルディング　史　呂選
びるでゝぐ雲の眞下のさらりーよ　鮎　美
(軸)ビルディング働くものを吸ふ朝
席題　臍　與三郎選
(人)しみ〴〵と苦勞を想ふ臍の垢　浮　鬼
(地)行水の小さな臍をみせにくる　靜　太
(天)一つづつ持つてる臍の面白し　浮　鬼
(軸)人間の神秘を臍に知りはじめ　與三郎
席題　唇　靜　太選
(佳)唇をとんがらかしただけ不平　青　鬼
(同)唇をぬぐひ冷い枕する　柳太郎
(同)紅唇のたゞそれだけで金にする　史　呂
(同)生きてゆくちからに唇がかなしく　鮎　美
(秀)少年の戀くちびるがあかくぬれ　詩與一
(軸)美しい言葉に唇ささげたり　靜　太
席題　鯉　緣　雨選
退院の眸についた鯉幟　まさる
泉水の鯉が浮いてる待ち呆け　流之介
幸福な二人に鯉は餌をもらい　浮　鬼
日本の空では鯉が似合ふなり　同
歸朝して日本の空の鯉幟　與三郎
鯉ほれて奈良は暮れゆく靜かな陽　鮎　美

川柳雜誌社
鮟川第二支部　**高松句會**　(島根)
五月八日夜　於松林寺　加藤健芳報
兼題　鍬　緣之助氏選
(佳)振上げる鍬へ燕の眞しぐら　田鶴緒
(同)手を休め鍬を休めて風の音　清　水
(同)鍬おいて上り列車をみつめたり　木葉子
(秀)墓の穴掘る鍬先の陽が斜め　凡　愚
不平みな忘れて鍬を洗つてる　さわだ
兼題　窓　田鶴緒氏選
(佳)旅立の窓に一冊屆けられ　健　芳
(同)チユーリツプアネモネ窓の下の戀　緣之助
(同)傾けるこゝろはさびし窓の月　好　郎
(同)戀捨てし朝アパートの窓の霧　緣之助
(同)車窓に雨でも女は默りつゞけ　木葉子
(人)花びらの工場の窓にすべりおち　凡　愚
(同)なつぞき母校の窓に見入る日の　同
(地)色々の心で春の窓へより　章　泉
(天)窓開けて五月の風も醉心地　凡　愚
兼題　眉　好　郎氏選
(佳)媚るかぼそき眉の持つイット　田鶴緒
(同)直線の眉が淋しく戀したり　木葉子
(人)眉墨もころがつてゐる女給部屋　凡　愚
(地)此の悲哀織りで眉毛のしる月　松　濤
(天)かげうすき女となりて描き眉　緣之助
席題　交　際　木葉子選
(秀)交際とは戀なり妹十六　好　郎
(同)交際費ポンとふくれて半期すん　緣之助
席題　膳　凡　愚氏選
(佳)代理といふ子へ一人前の膳　緣之助
(同)陰膳を据て妻の瞳のうるみ勝　田鶴緒
(人)高膳に座り未亡人と呼ばるゝ日　緣之助
(地)陰膳は母は何やら獨り言　同
(天)陰膳の灯に落ちて來た下りぐも　木葉子
席題　思　案　松　濤氏選
(人)さびしき思案の夕餉の箸しるし　好　郎
(地)思案する日へ悲戀の春嵐　同
(天)思案せず理性の力に強く生き　雨　舟
席題　違　ひ　雨　舟選
(佳)行き違ひ悲劇は悲劇生むなり　緣之助
(同)腹違ひ折紙なんかしてばかり　木葉子
(秀)違ひとは知りつゝ酒に知らぬ振り　凡　愚

川柳雜誌社
大鐵局支部　**畔柳社句會**
五月九日　於大鐵倶樂部(久米雄報)
兼題　乘　越　艸　樂選
乘越した女へ車掌たゞ笑ひ　久米雄
(人)乘越した車窓へ寒月冴えてゐる　喜　山
(地)乘越のれぼけた窓へお茶の聲　青　吾
(天)乘越をおろして尾燈ゆれて行く　紫　香
(軸)乘越した處は因果と田舍驛　艸　樂
兼題　永　住　艸　樂選
(人)墓掃除先祖にすまぬ畑を賣り　九　天
(地)恩給は須磨で死ぬ氣の家をて　同
(天)赤蜻蛉やつぱりこゝの土になる　水　客
(軸)永住のすつかり地酒に馴れて來る　艸　樂
兼題　恩　人　艸　樂選
(人)恩人へ送る手紙のかたくなり　秀　太
(地)北滿の義人へ涙は國を越え　秋　生
(天)恩人の落目を聞いて來る師走　某　人
(軸)恩人の好物を忘れぬ包紙　艸　樂

席題　浸談　某

(人)浸談の一人は爪を噛みつゞけ　人選
(地)浸談の底に忘れぬお追従　久米雄
(天)浸談家ふと眞劍に人を譽め　天秋
(軸)いつ來ても出世せぬまゝ談し好き　天風子

席題　ひげそり　水　某人

(人)ひげそりの鏡へ初夏の陽が強く　客選
(地)ひげ剃れば剃つたで淋し頰骨よ　秋生
(天)大晦日ひげそつてれる年になり　天秋
(軸)緣談を斷りに出るひげを剃り　秀太

席題　薫風　九　水客

明け放てば借家住ひも風薫る　天選
團參の赤い襷へ風薫る　某人
薫風へ子を差し上げて仕合せな　紫香
薫風に日の丸辨當ころんで來　天風子
薫風に鶴嘴置いてつかれてる　艸樂
風薫る奈良はひれもす風が鳴り　太選

席題　視線　秀

(人)制服の背に女の目を感じ　九天
(地)鼻をかむ心と別な目のやりば　水客
(天)差縷末座は視線くれたゞけ　秋生

川柳雜誌社　松江句會(出雲)

五月十日午後七時　於天神みどり喫茶園

兼題　燕　柳人報

突當るとこで燕は醜へり　祥月選
日本の柳戀しく燕來る　蚊河
吾が家の樣に燕の入つて來る　錦葉
空想の暗かすめて燕飛び　糸葉
日本に育ち燕の巣を殘し　笑鬼
自嘲する朝を燕の落ちた音　大鳥
スマートな姿で燕夏にする　柳人
去る人の俥燕がひるがへる　都之介
燕あゝコンクリートばかり　同

嫌題　手切金　莞

手切金蹴つておやりと姐藝者　路選
手切金母と云ふ名が待つてゐる　庄介
手切金その夜靜かな雨となり　山川兒
手切金出す糸口へ茱の冷える　同
手切金ぜゝら笑ひを交すなり　夢迷
手切金悲しき音のするものぞ　都之介
三度目は涙の潤れた手切金　同
手切金勝氣な顏の女なり　柳人
雨だれの音がしてゐる手切金　卷二
泣くために女生まれし手切金　同

席題　殺人　大

殺人があり漁村の灯は白む　鳥選
女あり殺人がある歡樂境　醉步
殺人鬼或る日情婦を戀しがり　鐘路
殺人はこゝでと知れる血の雫　文兒
太陽が恐くてならぬ殺人鬼　莞路
殺人に靄立ちこめし駐在所　柳人
殺人の家に小さい鬼門除け　卷二
殺人の眼光へ夜の蜘蛛が下り　祥月

席題　逢曳　山川兒選

逢引を包み若葉の靜かなり　柳人
逢引の前奏軒の雨雫　都之介
逢引を見送つてゐる月見草　卷二
逢曳の足は冷たい草を踏み　憲堂
逢引の二人露次から露次へ　鐘路
鐘搗けば淋し逢引泣ける宵　醉步
席題　白靴　都之介選

白靴を履いてもみたり病上り　憲堂
白靴も汚れたまゝの子澤山　莞路
白靴の汚れも結婚倦怠期　柳人
白靴が考へてゐる水溜　夢迷
白靴の踵もちびて秋の來る　山川兒
白靴が哀れに見えて秋近し　卷二

席題　錆　柳人選

錆て候形身で候五寸五分　庄介
大黑は子守の腰にさびてゐる　憲堂
門の錆よ百萬圓が無事　都之介
一人暮し出入庖丁が錆てゐる　夢迷

席題　豪華版　卷二選

(五・一五・事件)

主義に死す人一代の豪華版　柳人
豪華版大日本の空と海　鐘路
(滿洲國皇帝御來朝)
日滿旗こゝ歡迎の豪華版　莞路

川柳雜誌社　松江偶會(島根)

五月十三日夜　於祥月庵

題　酒、碁、話　榮吉

外は雨五目ならべにはづむ夜　又三
今日よく釣れたと酒を買ひにやり　月山
滿足な酒にふら〳〵ダンスなり　望天人
アルバムを指して故人の逸話なり　同
新地夜話朱塗木履がしづかなり　祥月
講堂の廣さに訓話とけてゆき　同
女とは別に靜かなコソプ酒　同
ぼうふらがわく生活の獨酌さ　埜輔

川柳雑誌社 伯耆句會（鳥取）

五月十六日　於美笑居　三鴨美笑報

兼題「家庭」　美笑　選

(佳)生花の香ほりも樂し　新家庭　起人
(同)長道中家庭の事など思ひやり　柳星
(同)新家庭持つたばかりへ召集令　鶏石
(同)金持ちとなつたら家庭二つ持ち　秀峰
(秀)小姑の少ない家庭に嫁きたがり　同
(同)家庭苦を子供に言さて母は泣き　鶏石
(人)金は別なやみの多き家庭なり　小判
(地)女教師も荒い言葉の出る家庭　起人
(天)金の有る家庭に生れて赤思想　秀峰

席題「新緑」　互選

若葉吹き西國巡る旅の人　鶏石
全快と共に新芽も吹き出たり　小判
新緑と共に希望が多くなり　柳里
新緑がつい日曜に散歩させ　起人
新緑の村へ來ている都會の子　美笑
新緑の小驛に着いて朝となり　同

席題「蛙」　互選

賑やかにつゞく田圃の夕蛙　鶏石
失戀は蛙の聲も淋しすぎ　小判
大蛙ゆる〳〵むきを替へて逃げ　秀峰
俄雨蛙ぽつかり浮んで居　起人
蛙鳴く苗代田にも月は冴え　同
寢返りを打つて蛙の聲を聞き　美笑
みだれ行く頭へ蛙の聲ばかり　笑月

川柳雑誌社 御池橋句會（大阪）

五月十七日夜　於日本樂器會社　西いわを報

席題「通り拔け」　互選

正札ばかり見てデパート通り拔け　夢裡
暗黑の小路を誰れか通り拔け　法林
出前持いつもの道を通り拔け　かほる
通り拔け今年の花もほめて行き　いわを
鼻歌も通り拔けてる朝の露地　青兒
二階から見られて知らぬ通り拔け　同

席題「一ポイント」　夢裡選

事務的に押すポイントの數の音　いわを
ポイントへ嬉しい暗示持たれる　かほる
ポイントの淋しい赤に夜が更ける　青兒
ポイントの責任を知る霜の朝　同
(軸)ポイントはこゝだ違算の理に返る　夢裡

席題「茶椀」　かほる選

ほがらかに醉ふて茶椀も叩くなり　青兒
しなやかに茶椀を持てば時雨する　暗栽
働けと朝の茶椀の音がする　いわを
お茶椀の模樣旦那の好みなり　同
三年目子の出來る茶椀買ふてみる　品子
社交術茶椀の燒きにほれ〳〵し　同
(軸)青疊茶椀は同じとこにあり　かほる

兼題「鯉」　かほる選

俎板の鯉妻氣味惡く思ふなり　暗栽
歡聲が上る鯉の群人の群　夢裡
失戀へ緋鯉の吹いた泡が消え　青兒
鯉幟ビルの眞下にひるがへり　いわを
貴人の拍手に集まつてくる鯉の群　いわを

川柳雑誌社 支部行人會 平井春光結婚祝賀句會（大阪）

五月二十一日　三鴨喫茶部　與三郎報

兼題「燕」　春光選

燕に聞きたい軒の娘さん　尭山
軍艦の煙を燕越して飛び　墨洲
湯歸りの女へ燕斜に拔け　史呂

兼題「浴衣」　春光選

大ジョッキ浴衣肩までまくりあげ　眞木
芝居裏揃への浴衣招かれる　尭山
湯上りの浴衣うつかり風邪を引き　節子

席題「奈良」　史呂選

ラブシーンだしぬけに來る奈良の鹿　墨洲
三笠山すし食ふ人を見て登り　與三郎
二ア人に猿澤池の鯉ははね　尭山
三笠上下駄を預けるとこがあり　春光
遠足の列を亂して鹿はゆき　節子
猿澤の池に二人は死をおもひ　同
(軸)遠出髷嬢草山へ來て疲れ　史呂

席題「眞節」　與三郎選

淋しくも眞節立てゝ髮を剪り　墨洲
逢ひにゆく下駄を揃へる赤手柄　節子
眞節の女の足袋の汚れやう　史呂
十年は長し眞節讃えられ　眞木
病む夫へダンサー藥買つてくる　尭山
眞節を髮に見せるも日本なり　春光
(軸)眞節も無智なる末の死を選び　與三郎

川柳雑誌社 御旅句會（大阪）

五月廿六日　於れぼけ堂　生田翠夢報

席題「肌」　翠夢選

小座敷の素肌に動く團扇を見　新水
限りなき肌淋しさを或夜知り　正光
肌付きの金を萬引持ちは持ち　同
(佳)鮫肌の男が怖い貴の風呂　同
(同)滿員の湯の氣味惡い肌に觸れ　秀山
席題「乘替」　正光選
乘替の多さ子供にまで飽かれ　新水
乘替へた電車で不義理の人に逢ひ　世間音
醉って居る男乘替くどく聞き　同
席題「暖簾」　新水選
つけて來たあの妓暖簾の中に入り　正明
暖簾に風あり河鹿鳴いて居る　世間音
コップ酒暖簾の外は十二月　清美
暖簾からお染の樣な娘が覗き　正光
結界も暖簾も藏へしまはれる　同
そよ風に暖簾のすきに立つ人形　秀山
暖簾から出る揚げ蕊の艶めかし　翠夢
醉って這入れば暖簾がもつれ　みつる
(人)垢じんだ暖簾に親しさあるなり　同
(地)次の日も暖簾の陰でさゝやかれ　翠夢
(天)緊張の返事暖簾で汗を拭き　秀山
(軸)策略も暖簾越しなる顏をあげ　新水
兼題「氣紛れ」　路郎選
ほがらかな春だ氣紛れ飛んで行け　正明
氣紛れの子供に金魚すくはせる　秀山
氣紛れに實驗室の廣さ見せ　同
名人の氣紛れ野崎村へ行き　正光
金持の氣紛れ慰藉料をとられ　清美
氣紛れな男と知つて惚れてゐる　世間音
(秀)氣紛れな且那お好み燒を買ひ

兼題「國境」　路郎選

國境をはなれ櫻が見たくなり　正明
國境で玩具のやうな札を吳れ　みつる
國境へラッパ半分づゝ響き　秀山
脫出をした國境に赤い花　正光
北緯五十度御紋標燦として　世間音
(秀)國境を出て君が代に涙する　路郎
川柳雜誌社　籔川支部　**大地吟社句會**
六月一日　金岡草路居にて
兼題「初夏雜景」　綠之助選
初夏の宵スチーム組んで行くもし　凡愚
(人)千切れ雲ボートと共に浮いている　朴泉
(地)初夏は此處が鈴蘭燈に靡く浮く　大朗
(天)衣更へ裸錢さげてぶらり出る　同
同「清算」　草路選
唇もふれず清算されし戀　華村
清算の朝淋しく粥をすゝりゐる　大朗
清算へ女の戀は輕かつた　さわだ
清算へ小さな悲劇ゝめて居り　同
清算とは悲しきあきらめの風鈴　好郎
席題　砂　大朗選
タッチアウトその瞬間の砂ぼこり　華村
弓ヶ濱續く一直線の砂　一鴻
(人)砂を吹き、吹き夏となれる風　綠之助
(地)童心に徹し陽の下の砂遊び　同
(天)十萬の眼を奪ひ砂けむり　同
席題　島　一鴻選
島の朝神鹽汲む人もあり日の出　笑朗
島は、みどりに夏の明け初める　綠之助
波の音ぢーっとときいて島の宿　凡愚
牡丹賣島の悲慘を話すなり　朴泉
島通ふポッポ蒸氣に洩れる唄　朴泉
席題「艶」　華村選
海の子の赤銅色に艶を持ち　綠之助
人間の艶が褪せてる息使ひ　一鴻
艶のない面を伏せて病みつゝけ　凡愚
川柳雜誌社　**神戸部友會**（兵庫）
六月二日　明珠居にて　竹楓報
題　影、意見、團結、嫁ぐ日、希望　互選
影のびて延びてゲリコも空になり　華水
我影もさびし頗杖のくせありて　竹楓
意見しに來て緣談へつりこまれ　吉左右
金のない人が意見をしてくれる　明珠
團結の心に觸れし卷煙草　華水
煙突の下の團結まだ固し　春秋
嫁ぐ日は心の隙も叱られる　華水
川柳雜誌社　**螢ヶ池句會**（大阪）
六月二日　於舊館娛樂室　綠紅報
兼題　兵隊　與三郎選
兵營へくる故郷からの嫁話　六朗
モリナガへ兵隊さんが立ちどまり　綠紅
兵隊の宿になる町旗をたて　浮鬼
兵隊にあこがれを持つ男の子　墨洲
母のない少暗へ星の光るなり　靜太
兵隊とあるくみんなの息がきれ　詩與一
顏知らぬ兵隊さんに握手され　節子
兵隊が通つて行つた砂ぼこり　史呂
(軸)繃帶の兵隊さん劍がなし　與三郎

兼題　空　　詩與一選

ろくがつの空の深さに默しゐぬ　緩紅
あをぞらに下駄はみじめによされる　源太
蒼空へ並んで立つて希望あり　墨洲
（佳）病床で見上げる空がちつちやな　まさる
（同）無一文きれいな空だなとおもふ　靜太
（秀）相愚れのきれいな空をみてゐる　同
（軸）空暗く娘に捨鉢に物が割れ　詩與一

兼題　蟬　　靜太選

病んでゐる子の掌に蟬が鳴く　柳太郎
自炊するキャンプ眞近の油蟬　史呂
愛の巢へ蟬が朝から啼きにくる　緩紅
蟬捕りにゆきます子供靴をはき　浮鬼
糸つけて壁へ蟬を歩かせる　節子
大佛の裏はひいやり蟬の聲　與三郎
涼へ行く道一筋の蟬時雨　同
惜しい夢さめてお晝の蟬をきく　源太
ほいきんぐ蟬なく森で午睡する　詩與一
（佳）蟬鳴きやんだ暑さ迫るなり　一更
（同）さゝやきへ蟬籠揺げた子が通り　與三郎
（同）ゆうせみがないて水枕しかへる　まさる

席題　男　　夫選

晴

まどごしに男を見てゐる女工たち　緩紅
かつきりと握る拳も男の子　義人
氣まぐれにおれも男と云ひきつて　源太
人相の悪い男が人を待つ　詩與一
秀ガメタンク男の影のひよろ長し　同

席題　珍　　鬼選

浮

珍しくけしやうしてゐる今日の母　義人
慾望を滿す珍品集めてる　柳太郎
珍らしい人だと母のうれしそう　與三郎
入場料とる珍らしさを輕んずる　同
珍らしい後家に交渉ある男　靜太
（佳）珍らしい顔でワイフをつれてゐる　詩與一
（同）珍らしい品インチキにしてしまひ　浮鬼
（同）珍らしい人へ寫眞屋呼びにゆく　川柳雜誌社

伯耆句會（鳥取）

六月四日　於美笑居　三鴨美笑報

兼題　汗　　美笑選

（佳）人生は汗又汗と働らけり　小判
（同）汗の玉ポロリと落ちて晝でした　柳里
（秀）親の汗見れば遊んで居れもせず　秀峰
（同）一家中美顏で立つて汗をふく　蘭鐘
（同）晩鐘に汗の一日暮れんとす　同
（人）貧された可感子供汗をかき　起人
（地）若旦那先祖の汗をみんな飲み　秀峰
（天）汗くさき顏手洗ひて巡拜す　鷄石

席題　螢　　互選

螢狩りどうやら他に意味があり　秀峰
いとし兒が螢手にして母に見せ　鷄石
失戀と知つてか螢淋しすぎ　小判
螢の光恩師の夢を見ていたり　柳里
池土手で螢はついに逃がしたり　起人
つきつめた二人を螢よけて飛び　蘭鐘
螢籠病む子の床につつてやる　同
もう一寸ととゞかぬ螢よく光り　美笑
螢籠ならべて子供好くれむり　同
螢呼ぶなかに我子の聲も聞き　同

阪大川柳會例會（大阪）

丸島利生報

兼題　耳　　路耶選

羽左に似た耳で長男かしこまり　栗
耳掃除丹下左膳といふ日付　同
耳掃除翡翠の玉は落ちんとす　柳秀
耳かくし五人の母を笑はれる　たけを
耳打ちをされて秘書官座をはづし　青一路
兒を負ふて耳の後のむら化粧　芳一
（人）耳掃除して奥れ醫者おにせる　方正
（地）早う云ひなはれ女將耳を貸し　路生
（天）逆境に居てほめられる耳の相　たけを

兼題　池　　路耶選

春の池緋色の力躍動す　塔下
山の池今宵のキャンプこゝと決め　洗塵
靜かなる池とて石を投げてゐる　芳一
池の龜又だまされた拍手きゝ　栗
溜池の蛙へ母は子を案じ　千秋
休職の釣竿たれる池の端　淺女
出てゆけと云ふたが夜半の裏の池　一杯
石投げて池の深さを見て通り　正甫
風流はよいが眠たい蓮の池　柳秀
（人）抱きとめる人が來そうな池の月　君女
（地）住宅地池を景色にしてしまひ　芳一
（天）龜の池龜の如くにおしだまり　路生

雜吟　路耶選

馬鹿になる事も役所で教へられ　たけを
男の子此處にも意りと鯉幟　利生
此の觀にして此の子あり切符きり　たけを
星空へ妄念の息吐きつくす　洗塵

留守番の鼻かむ音の　大きすぎ　路　耶選　栞

席題　蚤

鑑の下の蚤に清盛困りはて　栞　檀舎
蚤とりの手付自慢の一つにて　千秋
蚤とってから新聞讀み直し　同
坊の背を蚤が食つたで喧嘩なり　たけを
電話口蚤に喰はれたまゝで立ち　同
蚤取粉おまけの樣にふりまいて　利生
蚊と蚤の夜を父親よく眠り　同
とつた蚤思はず口へもつてゆき　同
(人)氣を付の姿勢へ蚤は用捨せず　柳秀
(地)指に唾つけては蚤の後を追ひ　青一路
(天)蚤にも喰はせず天下も執らず　路耶
(軸)朝訪へば蚤をつまんでゐるさま　同
(同)將軍の哀れは蚤にひけをとり　同
(同)方面委員蚤の飛ぶのを見て歸り　同

席題　開所式　互選

(五月二十八日大阪帝國大學微生物研究所開所式に臨んで)

開所式顯官名士の顏々々　青一路
開所式その人波にわれもゐる　利生
繪葉書が立派に出來て開所式　芳一
開所式名士の署名大き過ぎ　千秋
吉日へ足らぬがまゝに開所式　一杯
開所式寄附者大きなばらをつけ　青一路
開所式でくついて來る氣のまずさ　利生
開所式名士の金釋如才なし　千秋
象牙の塔財閥を居て開所式　一杯
開所式代議士と云ふ巾で來る　青一路
モーニングがお茶など運ぶ開所式　千秋
開所式所長ニコ〳〵説明し　利生
開所式あれ代理かと耳打ちし　同

第九回　尼崎句會（兵庫）　吉朗報

二月二十三日

席題　紐　互選

花嫁へ紐また紐がたんといり　串二
千日前ほどけたまゝの靴の紐　艸樂

兼題　又物　艸樂

今日もまた三面記事に又物ざた　榮山
この又物光つてる程きれもせず　路風
又渡りを見つめる顏のこはい事　遠見寺
酒ぐせにしては置けない又物沙汰　瓦作
宿直は又物をそつと隠して寢　同
着屋はあれですかと出又で指し　文月
この又物逆手に持ちし恐しさ　串二
又物鍛冶こゝまで切れる色をつけ　同
(軸)手術臺覺悟はしたがメス光る　艸樂

兼題　家賃　艸樂選

引越しの車へ家賃きゝに來る　串二
侮つた家賃位いが儲からず　瓦作
家賃だけ援けてもらふ新世帶　文月
家賃だけ儲ければよい店を出し　同
(軸)屋賃も拂はずスキーの留守をある　艸樂
(同)發展の街から立退きさせられる　同

三月二日

席題　靴　互選

靴音の聞えて會議一寸きれ　文月
ハイヒール人待つ時は足を組み　遠見寺

席題　涙人　互選

涙人の記憶に戻る古い友　長澤
涙人の二階で春を惜むなり　川舟
涙人となつていくらかやせたやう　文月

兼題　眼鏡　路耶選

ゴッゲルを額に壯途晴れやかに　遠見寺
塲所故か眼鏡で顏をかくしてる　路風
すつた燐寸眼鏡の中で燃えて消へ　南越
老牧師やがて眼鏡をくもらせて　文月
嬉しい日父は眼鏡を又ぬぐい　瓦作
(佳)双眼鏡いつか戀しい方へ向き　同
同床拂い眼鏡の塵も拭はれる　文月
(軸)孫の手で眼鏡飛ばされあてたり　路耶

兼題　斥候　路耶選

斥候に來た妓は醉つて捕虜にされ　瓦作
情報を持つてより合ふ喫茶店　南越
斥候も女の前で實を吐き　路風
支那服を着て斥候に加はりし　川舟
斥候に腕の時計も止つてゐ　同
斥候は擊てる敵をも見逃せり　長澤
斥候は逃げて戻るも役目なり　同
演習の斥候柿を一つもぎ　文月
(軸)を斥候に使ふ母親　路耶

三月二十三日

席題　指　互選

指切りの昔を語る人に會ひ　瓦作
人絹をわざ〳〵指でさはられる　艸樂

席題　滿員　互選

滿員車娘の後で締め切られ　路風

兼題　猫　艸樂選

(人)猫抱いて且那が辻を折れるま　南越
(地)引越しの跡に猫だけ鳴き明かし　瓦作
天)本堂のま晝へ廣く猫一つ　同
(軸)セメントの乾かぬ先に猫が踏み　艸樂

(同)背伸して起きて猫よどこへ行く　同
　兼題　機械　艸樂選
(人)機械にもたまに油と飲ませる　牛歩
(地)機械化の影に淋しい人の出來　同
(天)スパークに夜更の機械凄く見へ　良作
(軸)機械場にだれか鏡をかけてたち　艸樂
(同)同レッテルが機械で貼れて面白さ　同
(同)住み馴れや機械の音で兒が寢入り　同

川柳雜誌松江支部湖畔川柳會

合同川柳大會（島根）

五月一日　於來迎寺

松江柳界の奮起を促すため松江支部は近頃生れた新サーム湖畔川柳會と握手、此處に合同句會第一回の足跡を印し松江柳界の焦點たるを確保した。（宮古堂輔報）

　兼題　牡丹　堂輔選

牡丹賣る島の娘の聲さびし　庄介
新婚の組が牡丹の中にゐる　祥月
一本の牡丹長屋のお茶を呼び　鐵扇
牡丹の花は脂肪過多症　莞路
陽祀妃の或る夜に似たり艶牡丹　柳人
招かれたから賞めておく牡丹園　夢迷
紅牡丹昨夜の事を思ひ出し　卷二
白牡丹木鬼の音がきこへて來　同
丹精の牡丹を賞めたお茶が出る　耕二
(秀)蕾牡丹絲の中の寢息なり　文兒
(同)牡丹一輪五月の空にしてしまふ　夢迷
(同)深窓の美女緋牡丹に惱み事　卷二

　兼題　空想　耕二選

空想は大阪行の汽車にゐる　莞路
空想の瞳に白雲のなつかしさ　天痴人
湯加減もよし空想に耽るなり　庄介
空想は空想にして面白く　祥月
空想にされてしまつた怪氣焰　柳人
空想はばるか腮まで湯にひたり　山川兒
空想へひたすら爪をかんでゐる　星斗
空想と違ふ貧しい灯の暮し　鐵扇
空想が大平洋をのり切つた　同
(秀)空想が今現實の魔に追はれ　同
(秀)空想が生んだ女の轢死體　幸明

　兼題　鐵橋　卷二選

故郷は近し鐵橋見えて來る　天痴人
鐵橋は雨、朝刊に卦が一つ　莖輔
夜汽車ふと鐵橋へ來た音になり　糸葉

　兼題　鼻髭　鐵扇選

女房の前鼻髭もたわいなし　卷二
燒酎を呑む鼻髭は哀れなり　幸明
恩師今滿洲にあり八字髭　文兒
鼻髭を伸ばして用事のない男　錦葉

　兼題　放涙　糸葉選

放涙の女逢つた戀を持ち　耕二
放涙をあこがれて見る若さなり　笑鬼
失業は放涙性にしてしまひ　錦藥
放涙のためのベンチでないのなり　卷二
青空へ放涙性の群となる　柳人

　兼題　斷片　柳人選

斷片を綴つても見る二日醉　卷二
砲彈の斷片國防展覽會　文兒
戀愛の斷片を見る純喫茶　同
斷片がまだ生きてゐる手術室　天痴人
吸取紙斷片的な思想なる　同

卜居々三人集（大阪）

五月十九日夜

　獨酌　遊歩選

獨酌へ蚊が消へた郷愁よ　卜居
(佳)獨酌の兄へ蚊ぼひとりぼち　卜居
(佳)獨酌へばつとは折れてたりけり　鮎美
(軸)獨酌の後妻をもらふ氣になり　遊歩

　街の風景　卜居選

佳街は靜かに三日月さまは屋根の上　鮎美
(佳)北風の街に詩集がおちてゐた　同

　うす墨　鮎美選

うす墨の愁しき母の面影よ　卜居
(軸)まごゝろのまゝうす墨の走り書　鮎美
(同)うす墨に椿を添へた妓のいのち　同

三人寄りて（大阪）

　ぶるれたりあ　鮎美報

うれしさはぶるれたりあの掌の溫み　靜波
はちまきもぶるれたりあの型になり　同
雀々ぶるれたりあを恐れまい　觀月
ぶるれたりあ握りこぶしたしてるます　同
はね返すちからはぶるのものなるぞ　同
ぶるれたりあ、蝙蝠がとぶ夕まぐれ　鮎美
雲白ろしぶるれたりあのたくましさ　同
足並はそろふぶるれたりあの朝　同

松江市公會堂句會

五月二十三日夜　於なにわ旅館

川柳に手を染めて日は淺いが勤める者皆樂しく句を創つてゐる我等公會堂句會を川柳雜誌社松江支部の後援を得て開く。山川兒報

席題　末　席　庄　介選

（秀）末席でひたすら足をもむとゝ　都之介
（同）末席に疑はれてる人格者　柳人
同　巻　二選

末席はやゝ酔つてゐる聲になり　祥月
末席へ座つて今日の幹事なり　登美也
（佳）末席へ藝者仕方なさ相に酌ぎ　同
（同）末席を嬉ばせてゐる妓藝者　山川兒

席題　香　水　須磨夫選

香水の移り香がある二日酔　柳人
香水の匂がしてるデカメロン　幸明
同　笑　鬼選

香水を匂はせて來るハイヒ！ル　祥月
香水に用あり明日は逢へる日の　柳人

席題　辯　柳　人選

氣の小さい男の辯が面白い　巻二
煙草の輪こさへる辯の社長なり　須磨夫
我流にも一辯を特つ花を生け　比呂志
（佳）酒辯が父に似てるきわがられ　山川兒
（同）女默つて男の辯と戰ふ　巻二

同　比呂志選

（秀）惚れてゐる男の辯を嬉しがり　巻二

席題　カン〳〵帽　山川兒選

本嶋打カン〳〵帽が踊り出し　柳人
（秀）一日を疲れてゐるカン〳〵帽　祥月

席題　ノーネクタイ　都之介選

（佳）逢曳もノータイとなり蚤飛ぶ　柳人
（秀）ノータイが少し似合ふ地位に在り　笑鬼
（同）倦怠期ノーネクタイで朝を出る　柳人

兼題　贊　成　讓　二選

（佳）生きて行くための贊成も見ゆる　巻二
（同）贊成はずるが僕には母がある　山川兒
（秀）悪友が何故か贊成しないなり　登美也
（同）贊成へまゝよ鹹を投げてゐる　須磨夫
（同）正義派に贊成餘り少な過ぎ　登美也

兼題　ビ　ー　ル　登美也選

（秀）歸る氣に次のビールがねぬかれ　山川兒
（同）生ビール滲の飛沫を嬉しかり　柳人

寶グループの夕（東京）

六月二日夕、銀座春木屋に催す。

宿題　のぼる　花戀坊選

榮冠に今昇りゆく日章旗　乙羽
蝸牛垣根へのぼりきつて暮れ　車山
あどばるん今日の機嚢も風まかせ　三太郎
石段がまだある母へ珠數の房　瑤天

席題　うす物　一　吉選

うす物の帶へ通した汗を知り　醉月
羅に今年は女將痩せたがり　三太郎

席題　躍　る　默　六選

躍つてるのぢやない泥鰌生命がけ　三太郎
大漁の濱邊小魚の逃るまゝ　車山
甲上の子は家中を狹くする　健康
初鮎に心の躍る糸を投げ　久悅
行軍を見送る子供手を擴げ　雄町
人間も滲も躍つて夏來る　三太郎

席題　惚れる　醉　月選

岡惚れへ小さな嘘を付いてゐる　菊太郎
笑はれるだけの惚けを淋しがり　舞將
茶椀酒やつぱり俺は惚れてゐる　菊太郎

席題　力　瘤　杜　若選

ハンマーへ一家をさゝえる力瘤　瑤天
總ざらひ女將朝からつきまとひ　啾林子
婿にする話題親方膝を出し　三太郎

席題　雨　蛙　三太郎選

雨蛙虹を見た兒に見付けられ　笑菊
雨蛙他人の家に寢る夜なり　車山
雨蛙八ツ手の色も雨を待ち　はん鱗
雨蛙忙しくない古錦色　千草
雨蛙フムネの玉のやうな咽喉　同
物干の驚きとなつた雨蛙　吟川
雨蛙思ひ〳〵にきいてゐる　菊太郎

開店紀念 凡愚川柳亭句會（島根）

六月七日夜　川柳亭　凡愚居

兼題　繁　昌　緣之助選

繁昌へ丁稚の腕のたのもしき　朴泉
繁昌の無限の空が開けくる　好郎
繁昌へ亭主たゞ〳〵笑ひこけ　華村
タツタ笑醫一つのもつ繁昌　田鶴緒
繁昌はソロバン珠の音のよさ　雷門
繁昌へサービスガールのもイット　朴泉
（人共稼ぎ十年の大繁昌　田鶴緒
（地繁昌へ光るコップも嬉しくて　好郎
（天）繁昌へ睡眠不足を笑ふ朝　朴泉
（軸大繁昌流石隱せぬわらひ顏　緣之助

兼題　躍　進　好　郎選

（人正義——躍進日本の表徵よ　朴泉
（地躍進一路——朝風の足　緣之助
（天）躍進の一歩一歩に躍るもの　同

相撲吟　コップ酒　行司

（大關）コップ酒馬はば夕陽へうつせいで　凡愚
（關脇）コップ酒同志うつかりもりが合ひ　緣之助
（小結）ほんやりの味はやつぱりコップ酒　さわだ
田鶴緒

編輯の窓

柳汀

▲本號は前月の遲刊挽回により多少の餘裕を以つて編輯に當れたので、內容、體裁に留意した

▲川上三太郎氏の川柳指導講座は愈々本號より連載される事となり、諸兄の待望は充されたものと思ふ。

▲近作柳樽の新カットは田村孝之介翁伯を煩した清新のものと改め、川柳塔も組方にゆとりを示した。

▲ざつぴつ欄は銀波樓、久流美南北の三古豪に對して鮎美・綠之助、いわをの三新鋭と云ふ珍らしい對照となつた丈けでも興味が覺える。

▲「上汐町から」の欄を廢して本號より「柳界展望」を新設した、これは同欄にも書いてあるが、この展望欄で川柳界の總ゆる消息が一目で判る樣にしたいと思つてゐる、細大洩らさず御通信をお願ひする。

▲萬よし氏は久濶に紀行を寄せられ、雨迷君は窓話に記した通り活躍を期してゐるのは嬉しい

▲本號では原稿が非常に輻輳したので、八月特輯號を飾るため割愛したものが尠くない、御諒承を願つて置く。

▲暑中見舞の廣告は別稿の通り募つてゐる、本誌を後援する意味に於ても一口だけは必ず御申込を切望する。

水害御見舞申上候

併而謝御見舞

川柳雜誌社

麻生路郎

帥樂氏の謠曲「沒句供養」は句會の時にでも是非唸つて貰ふつもりでゐる。

日本名所名物川柳

投句募集

東京の卷

（六）「日本橋」三句　〆切七月五日

（七）「泉岳寺」三句　〆切八月五日

選者　前田雀郎氏

宛先　本社事務所

用紙　ハガキに限る

暑中見舞

廣告を募る

▽奮つて申込まれたし△

◇一口　金五拾錢

幾口でも申込んで下さい。

一口の原稿はなるべく簡單に願ひます。

▽申込期限

七月十日迄

（八月號に掲載）

大阪市天王寺區上汐町一丁目五一

事務所　川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇番

廣告御申込は成るべく振替を御利用の上（前金）に願ひます。（三錢以下の切手代用でも差支へありません）

前號訂正

△「書齋にて」路郎師の文中日本文學聯講明治篇（四頁）

鳴神かくづれおちくる（五頁）

△「月評街の高臺」帥樂氏の文中

こんな椅子へ蛭になつてゐてやろう　有爲郎（三七頁）

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人に限る。

▼各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▼文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第十二卷第九號課題

七月五日締切
（各題十句以內）

▼月　吉田水車選

▼時計　西村明珠選

第十二卷第十號課題

八月五日締切
（各題十句以內）

▼寺　福田山雨樓選

▼火鉢　竹內機見女　姬田夕鐘共選

每號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）　麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切は事務所宛

定價

一部　金參拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にでも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號・りと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和十年六月廿五日印刷
昭和十年七月一日發行

第十二卷第七號
（每月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　麻生幸一郎　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
發行所　川柳雜誌社　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
電話天下茶屋二五七九番
事務所　川柳雜誌社　大阪市天王寺區上汐町一丁目五一番地
電話南六四四番
振替大阪七五〇五〇番

禁無斷轉載

廣告料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

賣捌書店

（大阪）大賣捌大寶社書店—明文堂其他市內各書店—（東京）東京堂・巖松堂・吉岡書店・玉森堂・紀伊國屋・三味堂（神戸）米田、寶文館（國館）石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

川柳雜誌社關係の人々（順はろい）

贊助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長野晴濱　長岡半太郎　國枝史郎　藤村作　藤本卯之助　穎原退藏　淺田一　赤井清司　末弘嚴太郎　伊藤彥造　鳥山一步　大島濤明　大谷五花村　大西長三郎　岡田三面子　龜井晟修　川上三太郎　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　霍田銀波樓　安川久流美　前田雀郎　前田五健　食滿南北　吉田水車　宮岡白峰　高橋かほる　三輪夏曉　永田里十九　水谷鮎美　山本丹路　芝四葉　阿部閑生　清水友帆　平井蒼太　關本雅幽　平井春光　庄萬よし

同

柴谷宰二郎　篠原春雨　姪子省二　藤里好古　小林不浪人　森東魚　岩崎柳路　石曾根民郎　市塲沒食子　原史風　長谷川三汀　西村明由　西いわを山月　大鶴喜八　西八步　奥野禿山　岡田菜人　丘遊舟　吉川啞人　立井登美坊　中西おさむ　中澤濁水　村松夢裡　熊谷紅　松下小柳子　福田鶴峰　朝田新水　近藤勇　後藤青兒　江戸みつる　阿形一杉　明石柳次　青木史呂　眞田幸捐　笹田角丸　北山悟郎　生田翠夢　麻生路郎

編輯局（同人）

姬田夕鐘　日野華水　東谷聞路　橋本綠雨　平井奧三郎　西田艸樂　山本雨迷　廣田六浦　毛利九波　尾變人　福田山雨樓　須崎豆秋　首藤竹楓　麻生葭乃　住田亂耿

主幹

道頓堀支部（大阪市）幹事庄万よし　九三會支部（大阪市）幹事北山悟郎　神戸支部（神戸市）幹事首藤竹楓　國館支部（國館市）幹事龜井晟修　高知支部（高知市）幹事國澤春水　梅田支部（大阪市）幹事水谷鮎美　螢ヶ池支部（大阪府）幹事福田浮鬼　田邊支部（和歌山）幹事辻左馬　籔川支部（島根縣）幹事尼子助　京都支部（京都市）幹事平岩司郎　鳥取支部（鳥取市）幹事中島鐵州　堺支部（堺市）幹事八木美夜路　松山支部（松山市）幹事石丸晴朗　御旅支部（大阪市）幹事生田翠夢　天王寺支部（大阪市）幹事須崎豆秋　鶴町支部（大阪市）幹事宮岡白峰　御池橋支部（大阪市）幹事西いわを　松江支部（松江市）幹事岡崎祥月　鑾青支部（大阪市）幹事熊谷紅　大鐵局々部（大阪市）幹事植山九天　西條支部（愛媛縣）幹事荒井英賀夫　光耀會（大阪市）幹事竹內機見女　住吉支部（大阪市）幹事奧野禿山　今里支部（大阪市）幹事吉田水車　玉造支部（大阪市）幹事清水友帆　今治支部（今治）幹事曾我部宵明　光笑會（大阪市）幹事永田里十九　新居濱支部（愛媛）幹事越智虹子　伯耆支部（鳥取）幹事三鴨美笑　竹原支部（廣島）幹事町田承春　籔川第二支部（島根縣）幹事加藤健芳　行人會（大阪市）幹事平井春光

川柳雜誌案内

大號活字十四字詰三行金五十錢、一行附すごに金十錢、（但し前金切手代用可）
既號、絶版、句會案内、柳界廣告、その他

並製 **合本特賣**

「川柳雜誌」の合本第二卷より十卷まで

各壹卷 **金壹圓五十錢**

大阪市内送料壹册六錢
市外送料壹册廿四錢

大阪市天王寺區上汐町一丁目五二
川柳雜誌社

懸賞川柳募集

題「ダンス」路郎選
題「島」七月十日締切

その他雜吟を募る

▼用紙官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）

▼賞品秀逸數句薄謝を呈す

▼投吟所
大阪市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛

化粧新聞社

川柳きやり

菊判毎號七十數頁

毎月一日發行一部廿五錢

東京豐島區高田本町二の一
四六八 川柳きやり吟社
（取次所）川柳雜誌社事務所

紀南柳壇

選者 麻生路郎氏

旅行 五句

〆切 七月二十日

大阪市西成區玉出本通三ノ三六
麻生路郎氏宛

朝報柳壇

選者 增位汀柳

題「夕立」〆切七月十五日
題「島」〆切七月三十日

雜吟は〆切なし、用紙ハガキ

大阪市天王寺區上汐町一丁目 增位汀柳宛

毎日必ず川柳の記事が出てゐる大阪朝報をお讀み下さい。
（一ケ月五十錢、郵稅共六十五錢）

川柳雜誌 投句用箋

本社制規の投句用箋を左の通りでお頒ち致します、投句にはなるべく此用箋を御使用下さい。

五十枚綴 一冊 金拾貳錢（送料共）

▲御申込は本社事務所へ（切手代用も可）

本社七月句會

一、會場 川柳雜誌社會館（階下ホール）
上本町四丁目バス停留所四（約半丁）始めの四つ辻を南に折れると左に見える洋館

一、日時 七月十日（水曜）午後六時半

一、題 「避暑」三句 路郎選

一、講演 「未定」 西田艸樂

◎出席者全部に本社川柳マッチ（森東魚氏執筆）を呈上

◎路郎盃 兼題天位賞として路郎盃を授與

會費 30SEN

主催 川柳雜誌社

（幹事）綠雨、與三郎、史呂、春光、みつる、いわを、（句會係）禿山

川柳研究

川上三太郎主宰
（毎月一回發行）

一册 金廿錢
半年 金一圓
一年 金二圓

異色ある本誌の創作欄と初心者への入門欄をアナタは絶對に見逃してはいけません

見本希望者は二錢切手十枚同封左記へ

東京市王子區上十條町八五〇
發行所 川柳研究社

光耀句會七月例會

場所 キング喫茶室
南海線玉出驛下車
本通十五間道路北ノ辻西入

日時 七月廿日（土曜日）午後六時半

兼題 「鋏」「樹かげ」
各題十句以内

會費 參拾錢（遠方の方の兼題に投句歡迎）

主催 川柳光耀會
幹事 竹内機見女

道頓堀川を眺めて
一杯いかゞ……
南地宗右衛門町
琴富貴
電話南五六三番

美しい仲居さんの
お酌で……
四ッ橋畔
梅香留
電話新町三七七五番

ホームライクな
喫茶室で知られた……
南海線玉出
キング
電話天下茶屋二五七九番

呑み黨に歡迎され
てゐます……
南地芦邊劇場裏
まん朝
電話戎一五三一番

清酒

白鶴禮讃

白鶴の瓶たまることたまること
白鶴へみんな揃ふたいゝ話
いゝ酒と言へば白鶴持つてくる
白鶴を一本つけてからの事
百事意の如く白鶴呑んでゐる
當選に白鶴樽のままで來る
貧乏の中に白鶴だけの味

摂津灘 嘉納合名會社釀

われわれの誇ビール

特製ユニオン

全市場におくる
躍進ユニオンの特製！
さすが
本場を誇る
獨逸ビールを
遙かに　凌ぐ　この爽快味
これぞ！　日本の新ビール

新發賣

宮内省御用達
大日本麥酒株式會社　元造醸ルービ・ロッツサ・スピエ・ヒサア

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
川柳雜誌（第一三八號）
定價金三拾錢　送料壹錢